

Title	<翻訳>スラブ祖語から教会スラブ語へ : スラブ文語前史概説
Author(s)	Mareš, Václav František; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 1996, 15, p. 109-140
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79705">https://hdl.handle.net/11094/79705</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スラブ祖語から教会スラブ語へ  
——スラブ文語前史概説——

フランティシェック・ヴァーツラフ・マレシュ 著  
神山孝夫 訳及び註

František Václav Mareš:  
Vom Urslavischen zum Kirchenslavischen

Ins japanische übersetzt und kommentiert von

Takao KAMIYAMA

Вместо предисловия переводчика

Настоящая работа представляет собой преимущественно перевод очерка по предыстории славянских литературных языков в целом под пером всемирно известного славянского лингвиста-историка Франтишека Вацлава Мареша, который в текущее время заведует Институтом славяноведения Венского университета, являющимся несомненно одной из Мекк в данной области. Грешным переводчиком прибавлены карты, схемы и комментарии, которые изредка противоречат Марешу, но все же, надеемся, помогли бы читателям, особенно японским начинающим языковедам, в дальнейшем изучении как славянских, так и индоевропейских языков.

訳者の序

ここに訳出するのは、前世紀からスラブ学のメッカの一つであったウィーン大学スラブ研究所の主任教授 František Václav Mareš による Vom Urslavischen zum Kirchenslavischen である。同論文は、

スラブ語全体を鳥瞰することを目的として編纂された Peter Rehder 編 *Einführung in die slavischen Sprachen* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1991<sup>2)</sup>) の巻頭に載せられた、スラブ語の前史から現代スラブ諸文語誕生の直前までの言語的発達の概説であり、スラブ民族の故地や民族移動といった民族史にも言及がなされている。訳者の判断で副題「スラブ文語前史概説」を加えた。

同主旨を持つ類書は枚挙に暇がないが、この論文はそれらと比べて著しく要領よくまとまっており、かつそこには最近の研究成果も取り込まれている。訳者は1994年度から翌年度にかけてこの論文をゼミナールの教材として用い、確かに表記の方法などいくつかの点については同意できない箇所があるとはいえ、この論文が総じて言ってスラブ語前史の概説に格好であるとの考えに至った。慣れない訳出を決意した所以である。スラブ語史の鳥瞰を得るために利用戴ければ幸甚に思う。

### 凡例

利用の際に注意戴きたいのは下記の諸点である。

1. 原則として原文に忠実に訳したが、原著者による ( ) をはずした箇所がある。訳者による補足は【 】内に記した。訳者による説明のための言い替えは【= 】の中に記した。
2. 原註は脚注だが、印刷の都合に従い後註とした。原註の位置は本文中の右肩付き「<sup>]</sup>」で示される。
3. 特に印欧語比較言語学や音声学の前提知識が不十分な読者に便を図るため文末に訳註を加えた。訳註の位置は本文中の右肩付き「<sup>^)</sup>」で示される。
4. 理解を助けるため地図、図を本文内に加えた。
5. 相互参照の便のため各項目に番号を付した。
6. 地名は慣用に従って仮名書きとしたが、本文に引用された研究者名は原文のままローマ字表記とした。
7. 古代教会スラブ語の文字表は紙面節約のため省略した。
8. 比較言語学的に再建される印欧祖語には伝統的な Brugmann 流の再建形を用いた。内容的類型学の観点から提唱される印欧祖語の閉鎖音の実現については触れない。後者については山口 (1995: 217ff.) を参照されたい。
9. 言語名は原著のドイツ名ではなく、英名を基に下記のように略称した。

Bg	Bulgarian	ブルガリア語
Br	Belorussian	ベラルーシ語
BS	Balto-Slavic	バルト・スラブ語
CS	(late) Common Slavic	(後期) 共通スラブ語
Cz	Czech	チェコ語

E	English	英語
F	French	フランス語
Gmc	Proto-Germanic	ゲルマン祖語
Gk	Greek	(古典) ギリシア語
IE	(Proto-) Indo-European	印欧祖語
It	Italian	イタリア語
Lat	Latin	ラテン語
Lith	Lithuanian	リトアニア語
LS	Lower Sorbian	下ソルブ語
Mac	Macedonian	マケドニア語
OCS	Old Church Slavic	古代教会スラブ語
OE	Old English	古英語
OF	Old French	古フランス語
OR	Old Russian	古代ロシア語
Pol	Polish	ポーランド語
PS	(early) Proto-Slavic	(早期) スラブ祖語
R	Russian	ロシア語
Rum	Rumanian	ルーマニア語
SCr	Serbocroatian	セルビア・クロアチア語
Sln	Slovene	スロベニア語
Slk	Slovak	スロバキア語
Uk	Ukrainian	ウクライナ語
US	Upper Sorbian	上ソルブ語
VL	Vulgar Latin	俗ラテン語

目 次

訳者の序	109	原註	128
凡例	110	訳註	129
1. 故地と最古の言語段階	112	参考文献 (原著)	138
2. 民族移動	114	参考文献 (訳註)	139
3. スラブ諸語の分裂と学術的分類	115		
4. スラブ祖語	118		
5. 共通スラブ語	122		
6. 古代教会スラブ語	125		
7. 教会スラブ語	127		

## 1. 故地と最古の言語段階

1.1 「スラブ人の故地」というのは、スラブ人がその歴史時代の定住地に移住する前に住んでいた土地のことである<sup>(1)</sup>。この「故地」は東ヨーロッパのカルパチヤ山脈北方にあったと思われるが、その厳密な位置決定ははっきりとはできない。Niederle (1902; 1923; 1953) の古典的な見解によれば、その故地はヴィスワ川、西ブグ川、プリピャチ川からドニェプル川の中流域まで、また南ブグ川とドニェストル川の上流域まで延びていたとされる【図1 参照】。すなわちそこには東ポーランド、南ベラルーシ及びウクライナの一部が含まれていたことになる。Niederle はスラブ人の故地があるいはもっと西へ、エルベ川にまで延びていた可能性について非常に懐疑的である。Lehr-Spławiński (1940) はこの故地をずっと西に設定している。彼によればそれはエルベ川の中流域からヴォルィニの地（南あるいは南西ウクライナ）まで、北東ではヴィスワ川まで延びていたとされる。Arcichovskij (1954) はスラブ人の民族的由来を部分的に農耕民族のスキタイ人と結び付け、スラブ人の祖先の一部がドニェプル川右岸の地で、その右の支流ロン川の南にまで達していたと仮定した。近ごろ Udolph (1979) は河川名の研究を根拠に、スラブ人の故地をカルパチヤ山脈の北の斜面——西はザコパネと東はブコヴィナの間あたり——に設定しようとした。彼はスラブ民族 (Ethnikum) の民族的由来（形成の最初の段階）と故地（終わりの段階）とをあまり厳密に区別しておらず、彼の結論には不可欠な学際的基盤がない。それに対し Pleiner (1978) は故地を周辺部ではいっくらか削っているものの、古典的見解に立ち戻っている。

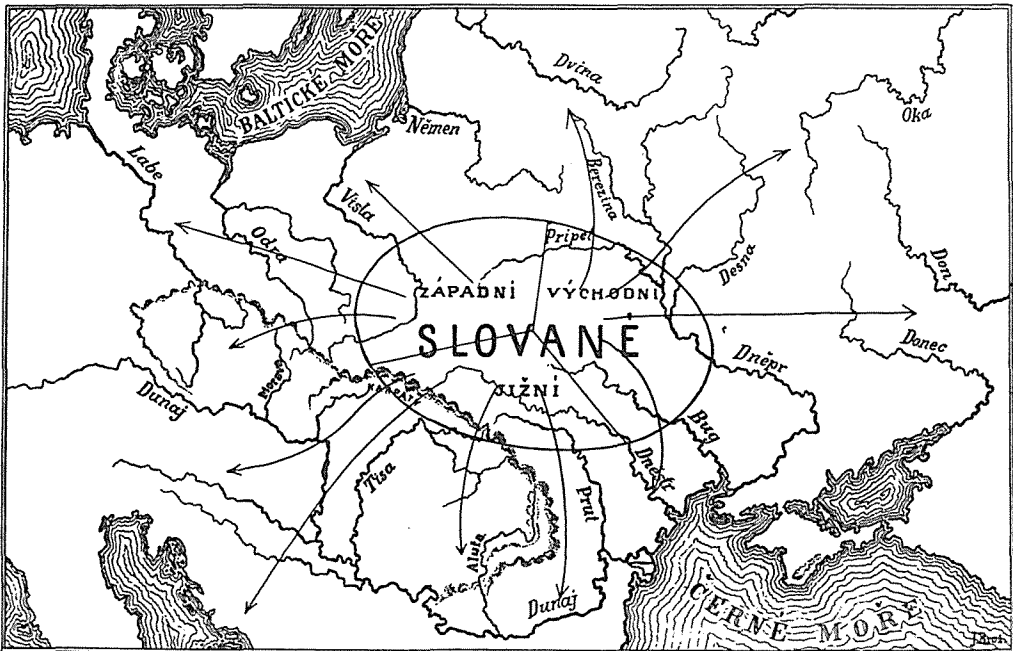


図1 スラブ人の故地 Niederle (1902: 129) より

1.2 スラブ人の祖先と直接に隣合っていたのは、北においてはバルト人、西ではイリュリア人とケルト人、南ではトラキア人、東ではイラン諸種族（スキタイ人を含む）であった。

1.3 インド・ヨーロッパ（印欧）語族の枠内ではスラブ語に最も近い関係にあるのはバルト語（リトアニア語、ラトビア語、特に古プロシア語）である。恐らくはバルト・スラブ言語統一体がかつて存在し、その後そこからバルト語とスラブ語が分かれたのである<sup>(2)</sup>。【図2参照】

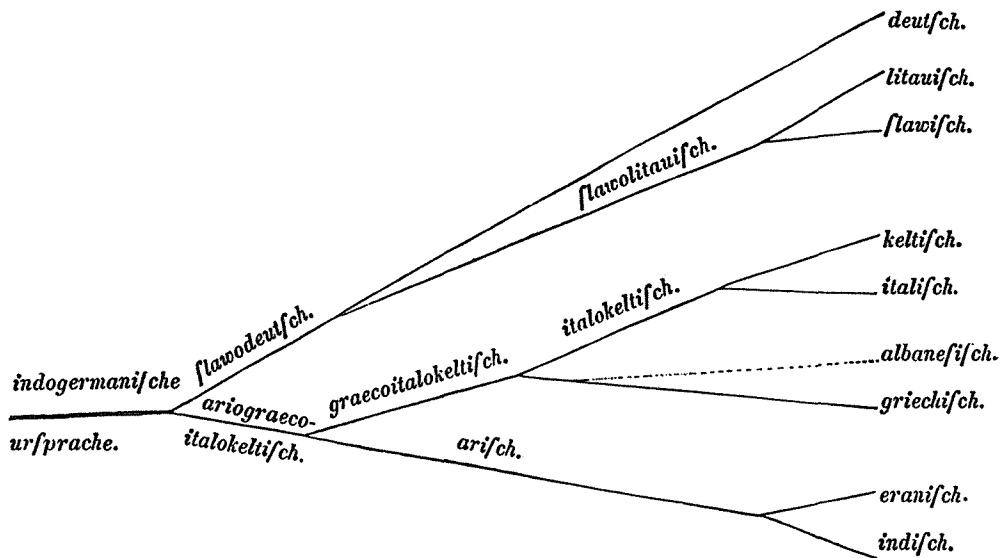


図2 バルト・スラブ語支持の系統樹 Schleicher (1861: 7) より

1.4 印欧語をケントゥム語群とサタム語群に二分する観点からは、スラブ語はサタム語群に属す。すなわち【印欧祖語の】軟らかい【＝硬口蓋化<sup>(3)</sup>した】軟口蓋音 \*k' \*g' \*g'h<sup>(4)</sup>を摩擦音に変えている<sup>(5)</sup>。例えば印欧祖語の \*kmt-「100」<sup>(6)</sup>はスラブ語では【PS】\*sytā<sup>(7)</sup>（>現代スラブ諸語 sto）だが、ケントゥム語であるラテン語では centum [k'entum]<sup>(8)</sup>となっている。

1.5 私はすべての母音（二重母音の【第二要素】-uを除く）の非円唇化（【BS】ō>【PS】ā, 【BS】ū>【PS】ÿ=ɥ【=u】, 【BS】ū>【PS】ÿ【=ū】）こそがスラブ語の音韻体系における【バルト・スラブ語からの】最古の分岐現象であると考えている。一方バルト語ではoだけが円唇性を失った<sup>(9)</sup>。Mareš (1969) を参照のこと。



図3 10世紀のスラブ人居住地（神山作図）

## 2. 民族移動

2.1 スラブ人の【上述の故地から】その歴史時代の居住地への拡散は比較的急速に行われた。スラブ諸民族による入植はほとんどすべての場所で6世紀に確認できる。最も遠方においても7世紀にはもう入植が完了していた。紀元10世紀終わり頃のスラブ人居住地の最大範囲のおおよその限界は次のように定めることができる【図3参照】。西ではイストラ半島—マルヒフェルト—（リンツ—レーゲンスブルク？）—ザレ川—エルベ川を結ぶ線。北では【エルベ川河口から】ヴィスワ川河口までのバルト海沿岸，そこからはヴィスワ川とその右の支流ブグ川の下流域，ブグ川の最北の地点からその線はベレジナ川の源泉へと続き，さらにラドガ湖，その先は東へスズダリの町まで。東ではスズダリ—ドニェストル川河口—黒海沿岸を結ぶ線。とは言え，スラブ人の入植がどこでも完結していたわけではない。多くの場所（例えばペロポネーソス半島南部までのギリシア，今日のルーマニア，オーストリアの一部など）ではスラブ人は山岳地帯に住み，谷や低地には先住民がいた。マジャール人の到来（900年頃）以後にはスラブ人はハンガリー（パンノニアの一部）の新たな住民に屈服し，あるいは彼らと融合してしまった。

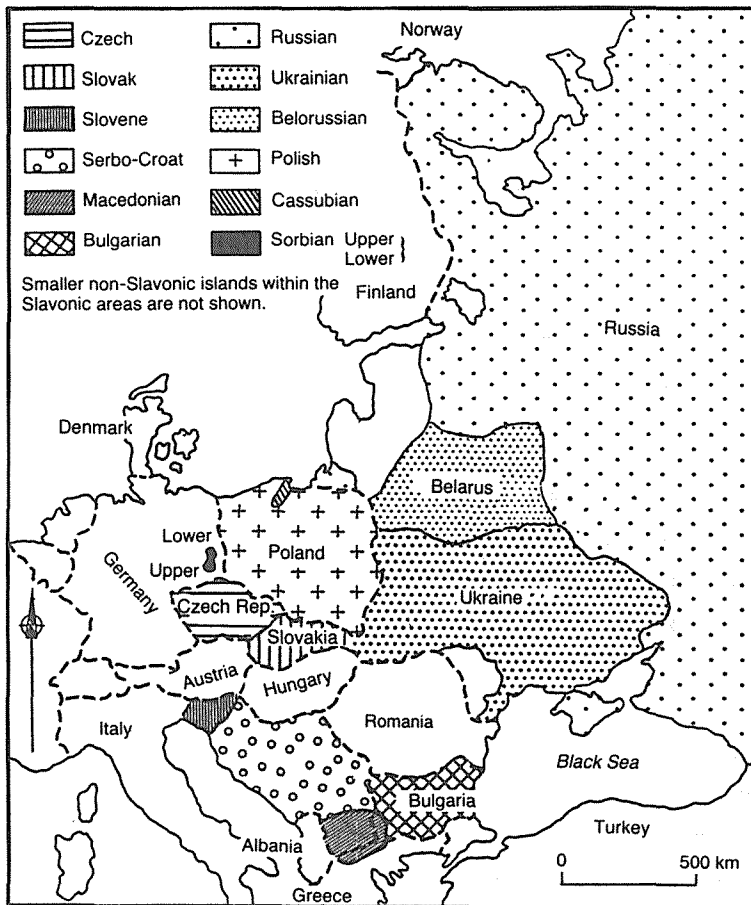


図4 現代スラブ諸語の分布 Comrie & Corbett (1993: 2) より

### 3. スラブ諸語の分裂と学術的分類

3.1 すでにスラブ人の故地においてさえ恐らくは種々の方言が存在していたと思われるが、この点についての我々の知識は非常に不完全かつ不確実である。後の発達の過程において大きな差異が生じるに至った。居住地の隔たり、異なる文化的関係、歴史の過程で形成されあるいは変容し、交替してきた政治的中心の影響、時には非スラブ的な土着の（基層）言語による干渉など、これらすべてが広大な地域の種族方言間の差異を深めることになった。【しかし】後の文語形成の段になると、これら【の諸方言あるいは諸言語】は自然なお互いに引き合う力によって、またもやその都度求心的な影響を【お互いの】言語発達に及ぼしあった。文語形成の時期は様々である。例えば古代教会スラブ語は863年に文語の地位に高められたし、チェコ文語は最終的に14世紀になって成立し、スロベニア語では16世紀、マケドニア文語が成立したのは（1944-）1945年のことである。今



日あるスラブ文語は、ブルガリア語、マケドニア語<sup>(10)</sup>、セルビア・クロアチア語<sup>(11)</sup>、スロベニア語、チェコ語、スロバキア語、上ソルブ語、下ソルブ語<sup>(12)</sup>、ポーランド語、ウクライナ語<sup>(13)</sup>、ベラルーシ語<sup>(14)</sup>、ロシア語<sup>(15)</sup>の12である。

3.2 これまで用いられてきた（「古典的」だが、後述するようにすでに時代遅れの感がある）【スラブ諸語の】学問的分類は、主として歴史音韻論的あるいは形態的基準によっている。典型的な例となりうるのはスラブ祖語の音連続 \*tj/\*kt と \*dj【アステリスクは神山】であり、これらはスラブ祖語の \*světja「ろうそく」／\*nāktь「夜」、\*medja「畦、境界」<sup>(16)</sup>によって例示される。この分類法に従うとスラブ諸語は【以下の】三つのグループに分けられる（三分割法 Dreiteilung, Trichotomie）：

- 1) 南スラブ諸語：ブルガリア語、マケドニア、セルビア・クロアチア語、スロベニア語—これらは \*tj/\*kt と \*dj の音連続に様々な反映を示す：

Bg. svešt, nošt, mažda<sup>(17)</sup>;

Mac. sveka, nok, mega<sup>(18)</sup>;

SCr. sv(ij)eća, noć, međa<sup>(19)</sup>;

Sln. sveča, noč, meja<sup>(20)</sup>

- 2) 西スラブ諸語：チェコ語、スロバキア語、上ソルブ語、下ソルブ語、ポーランド語—c, z（ポーランド語では dz）を示す。

Cz. svíce, noc, mez（ただし Pol. miedza<sup>(21)</sup>）

- 3) 東スラブ諸語：ウクライナ語、白ロシア語、ロシア語—č, ž を示す。

R sveča/noč', meža

ただし、ウクライナ語でも最後の例は meža だが chodžu「私は歩く」では \*dj から dž が生じている<sup>(22)</sup>。

西スラブ語にはすでに死滅したボラーブ語とバルト海スラブ語群（ポモジェ語群）<sup>(23)</sup>も含まれるが、これらは文語の段階にまで高められたことはない（ボラーブ語 svec'a/nüc, mig'a; カシューブ語 svéca/noc, mjeza）<sup>[1]</sup>。 (古代) 教会スラブ語は根本的には南スラブ語である。上で述べたような分類は組織的な、かなり閉じた区分であるが、【他方】例えばロシア語にはある程度ブルガリア語との関連もある。例えば語のアクセントの古い性格、子音の硬軟の対立等を参照のこと。東スラブ語グループは最も閉鎖的で、最も閉鎖性がゆるいのは西スラブ語である。つい最近までしばしば西スラブ語をレッヒ語群（ポーランド語、バルト海スラブ語、ボラーブ語）と非レッヒ語群（上記以外の西スラブ諸語）の二群に下位分類することがあった。

これらのグループ間には枠を飛び越えるようないくつかの反映形もある。例えば、チェコ語とス

ロバキア語はスラブ祖語の音連続 \*tart/\*talt, \*tert/\*telt<sup>(24)</sup> に対し、南スラブ語的な反映を示す。またチェコ語とスロバキア語の hrad「城」/hlava「頭」は南スラブ語の grad「町」/glava と同様の反映を持つ<sup>(25)</sup>が、その他のいわゆる西スラブ語では上ソルブ語 hród/hłowa, 下ソルブ語 grod/głowa, ポーランド語 gród/głowa はメタテーゼ後の延長による o>a を示していない<sup>(26)</sup>。

互いに隣接している言語の境界線の強さはまちまちである。例えば非常に近い関係にあるチェコ語とスロバキア語の間には明確な等語線の東が走っているが、より疎遠な関係にあるチェコ語とポーランド語の間には連続的な移行が見られる。

3.3 Dobrovský の提唱した、より古い二分割法 (Zweiteilung, Dichotomie) はもはや歴史的な意味しか持っていない。この分類法だと南スラブ語と東スラブ語が一つのグループを形作っていた。

Kopečný と Jakubinskij は各々独自に次のような分類を提唱している。

- 1) ブルガリア語とマケドニア語
- 2) 南スラブ語 (=セルビア・クロアチア語とスロベニア語)
- 3) チェコ語とスロバキア語
- 4) 上ソルブ語と下ソルブ語
- 5) ポーランド語
- 6) 東スラブ語 (ウクライナ語, ベラルーシ語, ロシア語)

3.4 我々の考えでは学術的目的に最もかなうのは、二つの軸を持つ、複合的な二分割法であり、これはすなわち四分割法 (Viertelung, Tetrachotomie) となる<sup>[2]</sup>。

水平の軸でスラブ諸語は南北二グループに分かれる。例えば、語末の【CS】\*ę は南スラブ語では -ę を、北スラブ語では -ě (「第三の Jat」)<sup>(27)</sup> をそれぞれ生じ、o 語幹名詞の単数具格 (造格) の語尾は南では -омь, 北では -ьмь である<sup>(28)</sup>。文法的な名詞的限定詞は南では少なくとも部分的には保存されている一方、北では文語においてすでにすたれてしまっている<sup>(29)</sup>。南では完了体の動詞についてさえも真の未来形が作られるが、北ではそうならない<sup>(30)</sup>。

縦の軸では西グループと東グループが区別される。例えば、西では母音の長短が存在している (セルビア・クロアチア語, スロベニア語<sup>(31)</sup>, チェコ語, スロバキア語) か、あるいは音韻体系の発達において本質的な役割を演じた (上ソルブ語, 下ソルブ語, ポーランド語) のに対し、一方東では【母音の長短】失われ、音韻発達においてもわずかな痕跡しか残していない (ウクライナ語は ē/ō>i という発達を示すので両者の中間にある)。また、東では強い ѣ と ѣ が質的に異なる反映を生じる (ѣ>e; ѣ>Mac, Uk, Br, R o, Bg ѣ, つまり軟口蓋的な ɔ<sup>(32)</sup>) のに対し、西ではこれらの反映は本質的に同じである (今では a, e, ə; スロバキア語, ソルブ語, 及び多くの方言では複雑な発音が記録される)。この全体としての「縦の」二分割は比較的不明瞭である。しかしこの分割は文化的条件による、純粹に外的な性質を持つ相違によって強められている。すなわち、西スラブ語はラテ

ン文字を、東スラブ語（及びセルビア・クロアチア語のセルビア版）はキリール文字をそれぞれ用いている点である。

これらの二つの軸を同時に用いることによって4つの下位グループが生じる。

- 1) 南東スラブ語グループ（ブルガリア語とマケドニア語）；このグループはバルカニズムの複合によって明瞭に特徴づけられる。また、これとともに例えば3人称の代名詞として *on* ではなく *toj* を用いることも際だった特徴である。
- 2) 南西スラブ語グループ（セルビア・クロアチア語とスロベニア語）；これらの言語は例えば語のトーン<sup>(33)</sup> を今日まで保持しており、陳述節にも目的節にも同じ接続詞 (*da* „*daß*“ を „*damit*“ の意味でも) を用いている。
- 3) 北西スラブ語グループ（チェコ語、スロバキア語、上ソルブ語、下ソルブ語、ポーランド語）；これらの言語は一般に PS \**tj*/\**kt* や \**dj* に対し *c* や (*d*)*z* という反映を持ち【3.2参照】、接続詞 *a* はその逆説的意味をほとんど失ってしまったことなど多数の特徴を共有する。
- 4) 北東スラブ語グループ（ウクライナ語、ベラルーシ語、ロシア語）；これらの言語に特徴的なのは、*korova*「雌牛」に見られるような充音（露 *полногласие*）<sup>(34)</sup>、さらには *sveča/noč'*, *meža* のタイプの反映【3.2参照】、幹母音を持つ動詞の現在一人称単数で語尾 *-m* を全く用いないこと<sup>(35)</sup> などである。

異なる組み合わせを示す図式も生ずる。例えば目的を表す接続詞 (*D* *damit*, *Lat ut*) は南【＝南東と南西】スラブ語では *da* であるが、北西スラブ語では *aby*, 北東スラブ語では *R čtoby*, *Uk ščob* (//*aby*), *Br kab* である。陳述節の接続詞 (*D* *daß*) は【上記の】四分割法に従って分かれる。すなわち西【＝北西と南西】スラブ語 *že* (下ソルブ語では *až*)、北東スラブ語では *čto*, 南東スラブ語では *Bg če*, *Mac deka*, *oti*, 南西スラブ語では *da* である。挿入音の *l'* の消失<sup>(36)</sup> は対角線状に、すなわち北西スラブ語と南東スラブ語に生じている。

#### 4. スラブ祖語

4.1 かつて「スラブ祖語」という概念は、バルト・スラブ言語統一体（紀元前二千年紀から千年紀）から、幾分なりとも独立した個々の言語の発達のはじまりまで（10世紀の終わりあるいはもっと後まで）のスラブ語の分岐の発達段階全体を指していた<sup>(37)</sup>。H. Birnbaum は学問的・方法的にもっともな根拠から、この【スラブ語の前史全体の】時期を【以下の】2つの部分に分けることを提唱した。

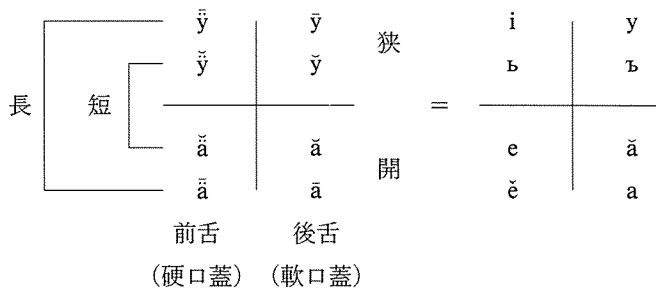
1) スラブ祖語：これはほとんど等質的発達が行われた時期を指す。我々は【スラブ語の前史における】母音体系の改変をスラブ祖語の最後の音韻現象とみなしている（詳細は以下参照）ため、

スラブ祖語の終わりをほぼ紀元後8世紀末あたりに設定することができよう。

2) ここでスラブ祖語の後にはより新しい発達側面が続く。この段階も【スラブ語は】多くの共通点を持っているものの、同時に明らかな分化傾向をも示す。この時期の言語を Birnbaum (1975) に従って「共通スラブ語」と名付けることにする<sup>(38)</sup>。

4.2 韻律のレベルにおいてはスラブ祖語は、自由で、移動し、音韻論的に有意義な単語アクセントや、音韻論的に有意義な母音の長短、及び【音韻論的に】有意義な単語音調の区別といった特徴を持っていた<sup>(39)</sup>。

4.3 音韻論のレベルでは何よりも二段階の母音体系が特徴的である。母音体系は開母音と狭母音から成り、それらは前舌あるいは後舌のどちらかの響きを持ち、短くあるいは長く実現された。これによって合計8つの単母音音素が区別される<sup>(40)</sup>。



Jer の音はまだ弱化しておらず、短い i y の音価を持っていた<sup>(41)</sup>。短い ā は一般に今日のスラブ諸語の o に対応する。

4.4 子音<sup>(42)</sup> 体系は当初四つの音素のペア (無声・有声) を持っていた：すなわち閉鎖音 /p-/b/ (唇音)、/t-/d/ (歯茎音)、/k-/g/ (軟口蓋音)；摩擦音 /s-/z/ (歯茎音) である。早期の段階で主として母音の前で i y r k の後にある s から軟口蓋摩擦音 ch が生じた<sup>(43)</sup>。

鳴音(ソナント)<sup>(43)</sup> は6つあった：/v/ (= [w], 唇音)、/m/ (唇鼻音)、/j/ (硬口蓋音)、/r, l/ (歯茎音)、/n/ (歯茎鼻音) である。母音の後にあって他の母音が後続しないとき、これらのソナントはモーラを持つ (韻律的に短い母音に等しい) 二重母音の第二要素となった：au, ei, ar, el, am, en 等々<sup>(44)</sup>。

4.5 スラブ祖語の音発達は本質的に二つの法則にまとめることができる：すなわち、1) 音節内調和 (Silbenharmonie), 2) 開音節の法則 (Gesetz der offenen Silben)<sup>(45)</sup> である。非軟口蓋音の硬口蓋化<sup>(46)</sup> は恐らくスラブ祖語の時代に開始されたのだが、その結果の最終的形成は共通スラブ語の時

代になってからである。

4.6.1 「音節内調和」は「軟口蓋音+硬口蓋【=前舌】母音」及び「硬口蓋ソナント(j)+軟口蓋【=後舌】母音」という連鎖において効力を発揮する。【上述の連鎖のように】音節内の調和が乱されると、無標項(軟口蓋音)が有標(硬口蓋音)となるという形で音節内の調和が形作られた。

4.6.2 軟口蓋音 k g ch は硬口蓋音の k ġ ch【恐らく IPA では [c] [j] [ç]】となり、それらがさらに č dž (>ž) š に歯擦音化した<sup>(47)</sup>。例えば、【PS】単数呼格 \*rake \*Bāge \*dauche は rače「蟹よ」, (\*Bādže>) Bāže (OCS Bože「神よ」), \*daūše (OCS duše「霊よ」)となる。kj gj chj という音連続も同じ発達を受けた。例えば, \*bikj->bičь「鞭」, \*mangj->\*manžь (OCS mužь「男」), pēchj->pěšь「徒歩で」。このようにして子音の硬口蓋の系列が占められ、音韻化はその直後に行われた。この音変化は「軟口蓋音の第一硬口蓋化」と呼ばれている。

4.6.3 j の後では後舌母音が前舌母音となった。すなわち ja は jě に, jā は je に, jь は jь に, jy は ji にそれぞれ転じた。例えば, \*jägā>\*jegā (【三人称代名詞】男性・中性単数属格, OCS jeho【語根 \*j-】, togo 参照【指示代名詞, 語根 \*t-】), \*jъgā (Lat iugum 参照) >\*jьgā (OCS igo「くびき」)。このような発達過程は「母音の硬口蓋化」<sup>(48)</sup>と呼ばれる。

4.6.4 後の時代に二重母音の ai が単母音化(以下参照)によって ě (語末では i) に転じたとき<sup>(49)</sup>, 【PS】\*kajna, \*nāgai, sāchai>【CS】\*kěna, nǎgě, sǎchě のような語において音節内調和が乱された。k>k などのような発達は上と同様に行われたが、第一硬口蓋化の歯擦音化はすでに終了してしまっていたため、この音発達は他の道へと進んだ。すなわち k は c【[ts]】へ, ġ は dz (OCS と Pol ではこのまま, それ以外ではさらに z) へ, ch<sup>(50)</sup> は s'【[sʲ]】を経て北東スラブ語では š【恐らく当初は [ç], 後に [j]】へ, それ以外では s(s') へとそれぞれ転じた。例 cěna「値段」, \*nǎdzě (ポーランド語 nodze, それ以外では -z-, 「足」単数与格・所格), \*sāsě> 北西スラブ語 soše, それ以外で sosě (例えばウクライナ語 sosi, 「すき」単数与格・所格)。この音発達は伝統的に「軟口蓋音の第二硬口蓋化」と呼ばれている。

4.6.5 「ь/i+軟口蓋子音+ă/a」の位置において、軟口蓋音は第二硬口蓋化の場合と同様に歯擦音化を受けた: 例 \*ăvьka>\*ăvьcě (古代教会スラブ語 овьса「羊」), \*kьninga>\*kьnǐdzě (OCS kьnędza, 「侯」単数属格), \*vьcha>vьsě>北西スラブ (Sorb.) wša「すべて」女性単数主格, それ以外は R vsja を参照。これはいわゆる「第三硬口蓋化」である。

4.6.6 【これらの硬口蓋化の】相対年代的な順序は伝統的な順序とは一致しない。第一硬口蓋化

は確かに最も古いのであるが、第二硬口蓋化は恐らく最も新しい<sup>(61)</sup>。最近、Lunt (1981) は第三硬口蓋化が最も古い(?) かのような見解を公表している<sup>(62)</sup>。

4.7.1 「開音節の法則」は閉音節を排除するように働く。音節末尾に子音があると、その音節は次の何れかの方法で開音節化された：

- a) その子音の脱落によって；例) \*rakad > raka 「蟹」単数属格, \*vĕd-sām > vĕsь アオリスト一人称単数「私は導いた」<sup>(63)</sup>,
- b) 音節境界を移動させるような音変化によって；例) \*ved-tej > \*ve-stej (OCS vesti 「導く」)<sup>(64)</sup>。

4.7.2 音節がソナントに終わる場合には、次の発達が生じた：

- a) 二重母音は単母音化された：すなわち ai > ě, au > ō > ū<sup>(65)</sup>, ei > i (=ī), eu > ū (> ū)<sup>(66)</sup>；例) \*paīna > pĕna 「あわ」, \*dauch- > duchь 「霊」, \*eītei > iti 「歩いて行く」, \*teuk- > tukь 「脂」<sup>(67)</sup>
- b) 「母音＋鼻音ソナント」という結合は(長い)鼻母音, すなわち a/ь+n/m > ã, e/ь+n/m > ę となった。例) \*ranka (= \*ranka) > \*rąka (古代教会スラブ語 rąka 「手」), \*desьmtь > desęть 「10」
- c) 閉音節における「母音+r/l」という結合の改変は確かにスラブ祖語の時代にはじまったのだが、その結果の最終的な形成は次の、共通スラブ語時代に属す。【5.2, 5.3参照】

4.8 円唇化母音音素 /u/ の(二重母音からの)出現はスラブ祖語の音韻体系における最後の重要な変化を引き起こした。母音音素【複数】は三角形に配置されるようになり、ă は o に、a は ɔ にそれぞれ転じた。例) 【PS】\*gāvāriti 【= gavarītei】> 【CS】govoriti 「語る」, \*rąka > rɔkɔ 単数対格「手」。

4.9 スラブ祖語の終わり及び共通スラブ語のはじめには次のような母音三角形があった(鼻母音は両わきに配置しておく)<sup>(68)</sup>。

	i	y	u/ū	
	ь	ь		
ę	e		o	ɔ
	ě	a		

このようにスラブ祖語は一時的に(円唇母音を欠く)十字形の二段の母音体系を持っていた【4.3参照】：この母音体系の出現はバルト・スラブ語【統一体】からのスラブ祖語の分岐を示し、この

母音体系が（円唇母音を含む）母音三角形に転じたのは【スラブ祖語の】時間的上限，すなわち共通スラブ語への移行期のことである。

4.10 スラブ祖語の語彙には特にイラン語とゲルマン語からの借用語が特筆される。

## 5. 共通スラブ語

5.1 共通スラブ語の時間的上限と我々が考えているのは Jer<sup>(59)</sup> の体系からの消滅と、鼻母音の非鼻母音化【=口母音化】（ポーランド語，バルト海スラブ語，ポラブ語を除く）である。一様に広範囲に及ぶ体系の変化は時代区分にとって決定的だからである。他の言語レベルにはそ【=時代区分】のための適切な手がかりにが見あたらない。このように共通スラブ語期は，広範なスラブ語圏の各地域における様々な事情によって，10世紀末から11世紀（あるいは12世紀まで？）の時期に終了した。

5.2 この時期には開音節の法則に従った発達は終了したが，それは「子音／ソナント＋母音＋子音／ソナント」という構成の音節の最終的形成によっている。これは何よりもまず【PS】\*tart/\*talt 及び \*tert/\*telt<sup>(4)</sup> という音連続（及び，若干異なるが，語頭における \*art/\*alt という音連続）に関連している。

これらの音連続はすべての南スラブ語及びチェコ語とスロバキア語において最終的に trat/tlat 及び trět/tlět となった<sup>(60)</sup>。例えば以下の例を参照：PS \*gardъ>OCS gradъ「町」【「囲まれたところ」】，\*galva>glava「頭」，\*bergъ>brěgъ「岸」，\*melko>mlěko「ミルク」。

その他の北西スラブ語地域では trot/tlot, tret/tlet が生じた：ポーランド語の grodu（単数属格）<sup>(61)</sup>/głowa, brzeg/mleko を参照せよ。

北東スラブ語ではこのケースで「充音」(Vollaut, Pleophonie, Polnoglasié) torot/tolot, teret/tolot<sup>(62)</sup> が生じた：ロシア語 gorod/golova, bereg/moloko を参照。このプロセスは 8-9(-10) 世紀に完了した。これと並行して tьrt/tьlt, tьrt/tьlt という連続もよりまれに【同様の】発達を辿った<sup>(63)</sup>。

5.3 語頭におけるアキュート音調<sup>(64)</sup>を持つ PS \*art/\*alt という音連続はすべての【スラブ】語で同様に rat/lat となる。例えば \*ram-「腕，肩」<sup>(65)</sup>，\*lakom-「甘い物好き」<sup>(66)</sup>。【一方】非アキュート【のこれらの音連続】は南スラブ語とスロバキア語では同じく rat/lat（例えばセルビア・クロアチア語 rāst「成長」，lākat「肘」）であるが，それら以外では rot/lot（例えばロシア語 rost, lokot'）となっている。

5.4 共通スラブ語期において「非軟口蓋閉鎖音+j」という音連続の reflex はその発達の最終段階にまで至る。

音連続【CS】\*tj \*dj の結果については上記【3.2】参照<sup>[5]</sup>。

\*sj \*zj は恐らくすでにスラブ祖語の段階で š ž になっていたと思われる (\*dusja<sup>(67)</sup>>【CS】\*duša「霊」, 【PS】\*nāzj->【CS】\*nožь「ナイフ」)。

\*rj \*lj \*nj は【両要素が融合した】r' l' n'<sup>(68)</sup>を生み出した：\*morje>mor'e「海」, \*polje>pol'e「野原」, \*къп jemu>къ nemu「彼のもとへ」。

唇音の後の j は l' (挿入音の l') となった<sup>(69)</sup>。R kaplja (<\*kapja)「滴」, rublju「私は切り倒す」, žuravl'「鶴」, kreml'「クレムリン」を参照。我々はこの挿入音の l' の現象がスラブ地域全体に広がり、後に南東及び北西スラブ語では消滅したものと考えている。

この発達の原因は何よりも tj pj のタイプの音連続における声の参与の不一致であった<sup>(70)</sup>。

5.5 二つの Jer 音は母音三角形の中で中舌化し、【それぞれ】弱化した e, ə あるいは o となった<sup>[6] (71)</sup>。弱化母音の音長は 10-11(-12?) 世紀に失われた。Jer を持つ音節の連続 (一つだけの場合も含む) においては、語末から数えて奇数番目の音節にあるすべての Jer は何の痕跡も残さずに消滅し、偶数番目の音節におけるそれは代償延長 (Ersatzdehnung) によって完全母音、すなわち e, ə あるいは o となった<sup>[7]</sup>。ə の音はブルガリア語にあり (ъ と書かれる)、さらにスロベニア語の後に延長されなかった音節にも現れる (ə, これは e と書かれる)。この ə はセルビア・クロアチア語、部分的にはスロベニア語 (延長された場合)、時にはスロバキア語でも a となり、北西スラブ語では e となった。【ただし、】ソルブ語ではほとんどの場合にこれがさらに o に転じている。スラブ諸文語における Jer の反映は以下のごとくである (例語としては【CS】\*сънь「眠り、夢」と \*днь「日、昼間」を用いる)：ブルガリア語 сън, den; マケドニア語 son, den; セルビア・クロアチア語 san, dan; スロベニア語 sən【正書法上は sen】、dān; チェコ語 sen, den; スロバキア語 sen, deň; 上ソルブ語 son, dzeń; 下ソルブ語 soń, zeń; ポーランド語 sen, dzień; ウクライナ語 son, den'; ベラルーシ語 son, dzen'; ロシア語 son, den'。その他の言語ではカシューブ語 sen, zéń, ポラブ語 báz「にわとこ」, dan となる。このような弱い Jer の消滅によって徹底して行われた開音節の法則の結果が廃されてしまった。すなわち多くの閉音節がまたもや生じたのである。そういうわけで、共通スラブ語期をもっぱら開音節を持っていた時期と同一視することができよう。

5.6 共通スラブ語から多かれ少なかれ独立した個別言語 (これらは必ずしも今日の諸文語とは一致しない) の時期への真の移行を形成したのは鼻母音の非鼻音化であった。ポーランド語には鼻母音が保存されていたが、これらは一つの音素 /a/[a/ä]<sup>(72)</sup> に合流してしまった<sup>[8]</sup>。その他の言語では前舌の鼻母音【e】は以下のようになった：すべての南スラブ語で e (例 petь>pet「5」), 北西スラブ語で ä (スロバキア語 pät' を参照、ただし色々なその後の変化が生じている)、北東スラブ



語では ä からさらに 'a (ロシア語 *pjat'* 参照)。【後舌の鼻母音である】*ɣ* はブルガリア語で *ъ* と書かれる *ɔ* に (*rɔka* > *rɔska* 「手」), マケドニア語では *a* に (*raka*), スロベニア語では *o* に (*roka*), それ以外の言語 (セルビア・クロアチア語, チェコ語, スロバキア語, 上ソルブ語, 下ソルブ語, ウクライナ語, ベラルーシ語, ロシア語) ではおしなべて *u* となった。

5.7 共通スラブ語の語形変化の特徴は以下のごとくである。

双数が名詞類でも動詞でも規則的に用いられていた。

名詞類は男性単数対格における有生性【=活動体性】を属格形で表現することを始めた (もともとは限定詞とともに)。7つの曲用格があり, 所格はまだ前置詞なしで用いられていた (もっともその用法はすでに限られていたのだが)。古い, 幹母音を基礎とした曲用パラダイムは激しく混乱し, その後, 文法性を基礎とするタイプの方向に体系的変革が行われた (この過程は恐らく形容詞についてはすでにスラブ祖語において完遂されたと思われる)。形容詞の長形と短形は文法的限定の表現に用いられていた (*dobrъ* 「良い」, *dobrъjъ* 「その良い」)。形容詞の比較法には二つの級【原級と比較級】しかなく, 最上級はまだ形成されていなかった。数詞のカテゴリーの形成の形式的なはじまりを見ることができる。

動詞は二つの単一の過去形 (アオリストと未完了) を持ち, 完了 (*neslъ jesmъ* 「私は運んできた (そしてまだここにある)」) はまだ広く結果の意味を示していた (これは例えば英語の *I have carried* のような現在完了に等しい)。【助動詞を用いる】迂言的未来 (古代教会スラブ語では「～したい」【*chotěti*】あるいは「～はじめる」【*načeti* や *vъčeti*】+不定形<sup>(73)</sup>) はゆっくりとしか発達しなかった。古い条件法の形成法 (*neslъ bimъ* 「私が運んだら」) は共通スラブ語の終わり近くにアオリスト形を持つ代替表現に取って代わられた (*neslъ bychъ*, その後も時制の区別を持たない)。

5.8 複文のシステムの形成は盛んに行われていた。受け継がれてきた独自の言語手段も用いられたし, 部分的にはギリシア語やラテン語を模した表現も使われた。例: ギリシア語の不定法構文の模倣—*a eže sěsti o desno mene* 【新約聖書】マタイ 20-23: *tò de καθίσαι* 【*ék dexiōn mou*】「私の右に座ること」; *ěko diviti se igemonu* マタイ 27-14: *ὥστε θαυμάζειν τὸν ἡγεμόνα* 「(そのことで) 総督はたいそう不思議に思った」。また, 陳述節を導く *D daβ* の意味で北西スラブ語は *ježe/jъže* (> *že*) を用いるが, これは *Lat quod* の模倣である。

5.9 語彙はギリシア語, ラテン語, 古高ドイツ語, ロマンズ語からの借用語によって豊かになった。

注記) 8世紀の終わりにスラブ祖語から共通スラブ語への移行が行われ, 後者は遅くとも12世紀には崩壊した。しかしながら, 個々のスラブ語のその後の発達の過程において驚くほど多くの共通

する傾向が保たれた。ここでは次の一例を引くにとどめる。すべての動詞の現在一人称単数の語尾における -m の一般化はスロベニア語では15世紀終わりに完了し、セルビア・クロアチア語ではこのような状態がその一世紀後に安定した。この地域から遠く離れて、下ソルブ語では同様の発達が18世紀の間に行われた（文語は今日に至るまで e- 変化動詞の m- 語尾を唯一の可能性として採用しているわけではない）。このようなケースでは一種の「類型学的共通スラブ語」が問題になっているのであり、その本質は様々な共通の（受け継がれてきた）体系的な所与条件に根ざしている。すでに長年にわたって独立して発達してきたスラブ諸語の体系の中には多くの同一の発達の可能性が秘められており、それは事情が整えば色々な場所で効力を発揮し得るのである。

## 6. 古代教会スラブ語

6.1 古代教会スラブ語は最初で最古のスラブ文語である。スラブの大モラビア公国（大まかに言えば今日のチェコとスロバキア【原文ではチェコスロバキア】の地にあたる、もっともこのような簡略化した比定には多くの欠点がある）の公であったロスチスラフは、ビュザンティオン皇帝ミカエール三世に、法に通じた使者を派遣してくれるように依頼した。まだ受け入れてからあまり時を経ていないその国のキリスト教を強化し、中世の国家に不可欠だった法秩序を導入するためである。863年、ミカエール三世は高位にあるコンスタンティノス（後のキュリロス）とメトディオス<sup>(74)</sup>の兄弟からなる使節をモラビアに向け送り出した。二人はテッサロニケー（サロニキ）の出身で、ギリシア語とスラブ語の二言語併用者であった。コンスタンティノスはコンスタンティノーポリスの大学の哲学教授であり、メトディオスは法律の専門家であった（修道院に戻る前には彼は国家の高官であった）。このビュザンティオンの使節は863年からメトディオスの没する885年までモラビアにおいて文化的活動を展開した。コンスタンティノスとメトディオス、及び彼らの弟子は多大な困難を克服しなければならなかった。特に、ロスチスラフ公が甥のスヴァトブルクの武力によって公位を追われて以降が散々であった。この点に二回にわたるローマ行きが関係している。その一回目にはすでに病を患っていたコンスタンティノスは修道院に入った（ここで修道名キュリロスを名乗る）が、そのすぐ後に没した（869年、於ローマ）。兄弟は幸運にもローマ教皇よりスラブ典礼語の認可を受けることができた。【二度目のローマ行きの際】メトディオスは大司教に叙階された。彼が没した後にはフランク王国寄りであったスヴァトブルクはその国のキュリロスとメトディオスの弟子達を追放した。彼らの一部はボヘミアに逃げ（そこはプシェミスル家の侯の領地で、大モラビア公の影響が希薄であった）、他の者は南東スラブ人の地へ（オフリド）、また他の者はダルマチア（クロアチア）の地中海沿岸地域へと移動した。このようにモラビアの地における古代教会スラブ語著作の痛ましい終焉は、スラブ人【全般】へのその本当の伝搬と浸透と同時に生じたのであった。マケドニア・ブルガリアの地域から古代教会スラブ語はロシアへ、セルビアへ、非スラブのルーマニアへと拡大して行ったのである。

6.2 モラビア使節のためにコンスタンチノスは最も重要な教会文書、法文書をギリシア語から古代教会スラブ語へと翻訳した。この文学的活動はモラビアにおいてさらに盛んとなった（ここではラテン語からの翻訳も開始され、創作も行われた）。この段階での全体の文学活動は言語的に完璧であり、あらゆる観点から見て驚くほど高いレベルにあった。これはスラブ語での著作、スラブ語での典礼ばかりか、ヨーロッパ的な意味におけるスラブの精神文化の始まりであったのである。

6.3 この目的のため、コンスタンチノスは彼の故郷テッサロニケーで話されるスラブ語の一方言を文語の地位に高めた。彼はこの言語を文法的に規範化し、統語論を完全化し、語彙を【他言語から】採用し豊かにした。当時のビュザンティオンの観点からは典札言語として用いられる言語（すなわち承認された文化の言語）は独自の文字を持っていなければならなかった。このためコンスタンチノスは古代教会スラブ語のためにグラゴール文字を作成した<sup>(75)</sup>。この文字は自由に作られたものである。その個々の文字は確かに時として色々なアルファベット（ギリシア、ラテン、東方）を想起せしめるが、全体としてはグラゴール文字は新しいものであった。それは古代教会スラブ語の音韻体系の要求を満たし、表記に適していた。ブルガリアではグラゴール文字の丸みを帯びた亜種が、クロアチアでは角張った亜種がそれぞれ発達した。

東では丸みのあるグラゴール文字が(10-)11世紀の間にキリール文字に取って代わられた。この(より若い)スラブの文字はギリシアのアンシアル(ウンキアリス)書体に基礎を置いており、スラブ【独自】の音に対してはグラゴール文字から個々の文字を借用している。1708-10年にキリール文字はロシアのピョートル大帝によって改変され、この形で今日までロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語、ブルガリア語、マケドニア語、及び部分的にセルビア・クロアチア語に用いられている。

クロアチアではグラゴール文字が深く根ざしており、ここでは民族的文化特徴の一つとみなされている。この文字がクロアチアの文化をキリール文字で書く東からも、西のベネチアの影響(ラテン文字)からも分離していたからである。スラブ語で書かれた典礼書の中でここでは今でもなおこの文字が一部に用いられている。

6.4 古代教会スラブ語は共通スラブ語の一支脈である。その基盤はエーゲ海の北西沿岸の方言であるが、文語としてはモラビアのスラブ人や、根本的にスラブ人全体のために制定された。それはそれまでにまだ存在していなかった地方的文語の役割を負っていた。したがって古代教会スラブ語は地域的なスラブ諸方言に音韻論的にも、文法的にも、語彙的にも広く順応した。しかしこれはある規範の範囲内で行われた。古代教会スラブ語には三つの亜種を区別することができる。すなわち、1) モラビア(キエフ断片)、2) マケドニア・ブルガリア(=典札的、「古典的」古代教会スラブ語)、3) スロベニア(フライジング断片)である。モラビア使節にとっての準備期間の間に最初のテキストが作成された、その本来的な「純粋な」古代教会スラブ語は、現存するいかなる写本にも保存されていない。Trubetzkoyはこの、仮想的な段階を「教会スラブ祖語」(Urkirchenslavisch)と命名

している。

6.5 そ【=古代教会スラブ語】の言語的特徴は、根本的にそれが共通スラブ語の分岐に係わっているということによって与えられる（上記参照）。特に最も古い文献（10世紀終わりから11世紀初頭）においては、それは開音節を持ち、Jer と鼻母音の割合規則的な状態を持ち、期待される南スラブ語の特徴を持った言語であった（例えば「魂」の単数属格は *dušę* であって、北に見られるような *dušě* ではない；「馬ろく」は *chranilo* であって、チェコ語に期待されるような *\*chranidlo* でも、北東スラブ語に期待されるような *\*choronilo* でもない）。

正典的 (kanonisch) な古代教会スラブ語に特徴的なのは特に以下の諸特徴である。【CS】*\*tj/\*kt, \*dj* の連続に対しブルガリア語的な反映 (*svěšta/nošti, mežda*) を持つこと、古い特にグラゴール文字で書かれた写本では *ě* と *ja* の書き分けがないこと (*bělaě=bělaja* 「白い」女性単数主格)、音韻論的に有意な *j*【を表す手段】がないこと (*ego, moeę=jego, mojeję*) 等々である。

統語論に関しては名詞付加与格 (*dativus adnominalis*, あるいは所有与格とも) と絶対与格 (*dativus absolutus*, 独立与格とも) が特徴的である。例：(名詞付加与格：) *chramъ molitvě* 「礼拝堂」；(絶対与格：) *ešte glagoljōštu emu* 新約聖書ルカ伝22-60【Gk.】*ἔτι λαλοῦντος αὐτοῦ* (絶対属格)、【Lat.】*adhuc illo loquente* (絶対奪格) 「彼がまだ語っていたときに」。

新たな文化概念の領域において、特に宗教や教会用語において、古代教会スラブ語は直接・間接を問わずすべてのスラブ諸語に影響を与えた。

6.6 古代教会スラブ語は共通スラブ語の一支脈であるという事実、及び個々のスラブ諸語のその後の発達にとってある程度分母の役割を演じた（例えば Jer, 鼻母音, 時制体系に関して）という事実を根拠として、この言語はスラブ語研究にとっての確固とした、欠くべからざる基盤となっている。その古風な性質によって、この言語はまたインド・ヨーロッパ語学にとっても価値を持つ。その成立時において多くの重要な発達過程（例えば名詞曲用の改変, 合形成容詞【=長語尾】の曲用の成立）を観察することを可能にするのであるから、この言語は同時に一般言語学に対しても計り知れない価値を有しているのである。

## 7. 教会スラブ語

7.1 ほぼ12世紀（ボヘミアではすでに11世紀）にこの言語はスラブ語著作のコイナーとなった。これはもはや存在していない方言【=古代教会スラブ語】にではなく、文学的伝統に依拠したものであった。この言語はまだできあがっていない地方の文語の代わりにその後つとめ、発達によってすでに本質的に強まった地域的差異（より強い遠心的傾向）にますます順応して行った。このような文語と地方語の干渉は古代教会スラブ語の時代よりもずっと自由に行われ、時には少々カオス的

とも言えるほどであった。例えば同じ単語が一度は文体的に高い（古代教会スラブ語の）形で現れるのに、別な箇所では民衆的な形で現れるというようなことが生じ、語彙は由緒正しい典礼的な表現も、地域的単語も含んでいた。正書法はもはや存在していない音を表す文字も（しかししばしば間違った場所に）依然として用いていた。約言すれば、規範が揺れていたのである。それにもかかわらず、この言語はスラブ諸語間の文学的相互関係の統合的手段であり続けた。このような言語期は「教会スラブ語」と呼ばれる。

領土的分化の結果として、地域的特色を持つ Redaction あるいは Subredaction が現れた。この二つの概念を正確に区別するのは非常に困難であるため、ここでは6つの Redaction からなる伝統的な分類を記すにとどめておく：1) マケドニア・ブルガリア版、しばしば「中期ブルガリア語」と呼ばれる；2) セルビア版；3) グラゴール文字で記されるクロアチア版；4) チェコ版；5) ロシア版；6) ルーマニア版、これはブルガリア版あるいはロシア・ウクライナ版を基礎に比較的少数のルーマニア語の要素を加えた混合 Redaction である。

地域的色彩を持つ構成要素の割合も時代によって様々である。その典型的な例が15世紀におけるロシア教会スラブ語へのブルガリア的要素の侵入（「第2次南スラブ語の影響」）である。

チェコ教会スラブ語はザサウ修道院（サーザヴァ、スラブ語での礼拝は1097年に公ブジェチスラフ2世によって導入された）におけるスラブ語典礼の廃止によって終焉を迎えた。その他の Redaction はその後の近世にまで、つまり当時の文語が最終的に制定され、浸透するときまで、生きながらえた。

7.2 現存する文語が制定された後に、今度は教会スラブ語は典礼用の言語あるいは一種の神聖語 (lingua sacra) として生きながらえた。このような状況の下では、当然ながら新たな（入為的な）規範化と、強い急進的発達が生じた。この時期は「新・教会スラブ語」(Neukirchenslavisch) と呼ぶことができよう。最終的には以下の二つの新・教会スラブ語が固定化した：1) ロシア型（正教徒と合同教会信徒 (Unierten)<sup>(76)</sup> のピサンチン風典礼における)；2) クロアチア型（クロアチア人とチェコ人のローマ風典礼における）。ボヘミア、モラヴィア、シレジアのスラブ語典礼に対して1972年にチェコ型が形成された。

7.3 現代のいかなる文化現象も時の真空に浮かんでいるわけではない。それらはすべて古い根幹に遡り、さらに未来に向けて進んでいく。言語と文学についても全く同じことが言える。したがって、過去を知ることはあらゆる言語研究あるいは文学研究の統合的な、欠くべからざる、重要な要素なのである。

#### 原註

[1] 3=dz. バルト海スラブ語群の中で唯一今日まで生きながらえている言語であるカシューブ語（【ドイツ名】

ダンツィッヒ Danzig / 【ポーランド名】グダニスク Gdańsk の周辺地帯に残存) は今日では事実上ポーランドの方言グループの一つとみなされている。

- [2] 系統的親近性と類型論的親近性 (バルカニズム) の両面が考慮に入れられている。—このような分類法でもすべての問題を解決できるわけではない。何しろ境界線を越えるような反映もあれば、方言的な古語、新語、個々の言語での特別な発達もあり、これらによって常にある種の「残金」が残ってしまうのである。どんな分類をしたところで「残りのない」分割などではしない。根拠のある、簡略的な抽象化こそ事情を明らかにするのに役立つ、比較言語研究に不可欠な展望を高めるのである。
- [3] ソナントとは、無声のベア音素を持たない非母音音のことである。(中和に基づく大まかな規則は以下の通りである: 例えば, *ovca* 「羊」が [ovca] と発音されるようなセルビア・クロアチア語の方言の体系においては, *v* はソナントである。/v/ と /f/ の間に音韻論的な声の関与の相関関係がないからである。一方, [ofca] という発音が導入されている方言では *v* は子音【= 噪音】である。) 詳しくは Mareš (1969: 11-13) を参照。
- [4] *t* は (*j* を除く) 任意の非母音音素を示す。
- [5] \**kt* (OCS *nošti* 「夜」) あるいは \**gt* (OCS *mošti* 「できる」 = \**mog-ti*) というグループも \**tj* の結合と同じ結果を示す。ただし \**kt*/\**gt* が非後舌母音の前にある時に限る。\**gn* は \**gñ* (oǫń 「火」) となるが, \**kn* > \**kñ* の変化も別に扱われる。(kñigy 「本」だが, 恐らく二次的な, しかし古い併用形 kñigy もあり, 両者の混交によって kñigy が生じたと思われる。) Mareš (1969: 78, 7) 参照。
- [6] *o* という文字で表すのは軟口蓋の *e* である。この音が弱化すると *o* に等しくなる。【不正確な表現。詳しくは訳註32参照。】
- [7] 【語末から数えて】奇数番目の音節の *Jer* には「弱い」しるし (ǫ ɛ) を, 偶数番目では「強い」しるし (ɛ ɔ) をそれぞれ付す。
- [8] 15世紀の後半になってはじめてポーランド語の鼻母音【複数】の区別が再度行われるようになった。今回の区別は音長によっている。短い *ǫ* は *ę* に, 長い *ǫ* は *o* (*ą* と書かれる) へと転じた。例: *pięć* 「5」, *ręka* 「手」, *piąty* 「5番目の」, *mąka* 「小麦粉」。—カシューブ語, スロビンツ語, ポラブ語にも鼻母音が保存された(ただし色々な特例的発達がある)。

### 訳註

- (1) スラブ民族の故地研究の現状について日本語で概観したものに伊東 (1986) が, また印欧語族全体の故地研究の歴史については風間 (1993) がある。
- (2) バルト語とスラブ語は非常に明らかな類似性を示すが, その系統的近親関係については研究者の見解に最終的な一致を見ていない。以下にその概要を記す。井上 (1986: 1-34) は日本語で書かれているので参照されたい。

言語の系統的発達を提唱した Schleicher の系統樹 (図2参照) ではゲルマン語とスラブ語 (及びバルト語) は印欧語の一つの大枝を形成するとされ, そこからゲルマン語とバルト・スラブ語 (図2ではスラブ・リトアニア語) が分かれたとされている。

バルト語とスラブ語とはかつて一つであって, 後にさらなる枝分けれによってそれぞれが生じたという Schleicher の見解は Brugmann (1898) に受け継がれたが, Meillet (1908) はこれに反し, 両者の類似点を系統的近親性ではなく平行的発達の結果であるとした。それ以降幾多の説が出されたが, 結局は Schleicher (Brugmann) か Meillet の説のバリエーション, あるいは両者の折衷である。

果たしてバルト語とスラブ語は兄弟なのか, あるいは近くに住んで関係が密だった遠い親戚なのかを判断することは難しい問題だが, 今世紀後半にこれらの言語のアクセントの歴史的な研究が進むに連れて, ますます多くの研究者がその前者, すなわちバルト・スラブ言語統一体の存在を肯定的に受けとめるようになっていく。原著者の Mareš もまたその一人であろう。ただし, いわゆるバルト・スラブ語の史的アクセント論は, バルト語とスラブ語のアクセントがかなり著しい類似を示すために, これらが一つの源から

分かれたとの仮説に基づいて近年発達したと言ったほうがむしろ正確である。その成果があまりにもはんざで現実言語に起こり得たのか疑問にも感じられるため、バルト・スラブ語の史的アクセント論の今日までの成果は、シンプルな地動説に対する非常に複雑な説明を要する天動説のように、コペルニクス的な発想の転換によってあるいは崩れ去る可能性すらある。したがって、この観点からのバルト・スラブ語単一説の証拠には非常に注意して接する必要がある。

- (3) 例えば英語を代表としておくと palatal や palatalization を「口蓋音、口蓋化」と訳するのは一般的ではあるが明らかな誤りである。これらが解剖学的名称 hard palate 「硬口蓋」に対応する形として用いられる場合、正確にはそれぞれ「硬口蓋音、硬口蓋化」とされねばならない。例えば「軟口蓋音の口蓋化」は口蓋の一部である軟口蓋で調音される音が口蓋で調音される音になるということであるから、あたかも「スパゲッティをパスタにする」のように全く情報を持たない無意味な表現である。詳しくは神山(1995: 12, 247)を参照。以下では「口蓋」を本来の意味である硬口蓋と軟口蓋の総称としてのみ用いる。
- (4) 再建形のアステリスク(\*)は訳者による。\*k, \*g \*gh や \*k \*g \*gh のようにも記され、伝統的には palato-velars と呼ばれる。一般には硬口蓋化した軟口蓋閉鎖音 [k] [g] 及び帯気音 [gʰ] を表すと説かれるが、むしろ硬口蓋閉鎖音 [c] [j] [jʰ] であった蓋然性が高い。これは以下に述べるように印欧祖語に2種類あるいは3種類あったと考えられている口蓋閉鎖音の一列で、これらを総称する際、伝統的に gutturals 「喉音」という用語が用いられることがあるが、現在の音声学的観点からは不正確なので勧められない。

印欧祖語にあった口蓋音が2系列なのか3系列なのかは議論の分かれるところで、印欧語の分岐的発達の説明のためには後者が有利な反面、3種類の口蓋音(その場合には恐らく①[c] [j] [jʰ]/②[k] [g] [gʰ]/③[q] [G] [Gʰ])を持つような言語は類型学的に存在する可能性が小さいという弱点を持つ。詳しくは高津(1954: 66-74), Mayrhofer (1986: 102ff.), Szemerényi (1990: 60-69)等を参照。訳者自身は、印欧祖語の最古の段階において存在していた①②③の区別が後の段階で崩れ、方言によって①と②、あるいは②と③の区別を失って結局2種類となったと考えている。

- (5) 印欧祖語の \*k \*g \*gh は、スラブ語の [s] [z] [z], リトアニア語(バルト語派)の š [j] ž [z] ž [z], サンスクリット(インド語派)の [ç] [j] [h] (一般的転写法では ś j h, [j] [dʒ] [h] と記されることがあるが不正確)、不完全ながらアヴェスタ語(イラン語派)の [s] [z] [z] にそれぞれ対応する。これら、すなわちスラブ、バルト、インド・イラン、及びアルメニアの各語派を、アヴェスタ語の「百」を表す satəm (<\*kmtom) を代表にしてサタム語群と呼ぶ。上記以外の印欧語はこのような摩擦音化等を起こさず閉鎖音性を保っており、ラテン語の「百」centum を代表にケントゥム語群と呼ばれる。

また IE \*kmtom は \*kmt-t-om と分析され、第一要素は \*dekmt- 「10」のゼロ階梯、すなわち本来的にアクセントを受けずに母音部を失った形 (\*dkmt->\*tkmt->\*kmt) を、第二要素は序数を示す。つまり \*kmtom は「10番目の(10)=100」が原義と思われる。

- (6) 註5に記したように語尾を加えると単数主格 \*kmtom. 比較言語学においては(.)はその子音が母音のように音節を成すことを表す。煩わしいことに、音声学では音節を成す子音は [.] で表され、[.] は無声化を表す。
- (7) これは後述の早期スラブ語 (Frühurslavisch, early Proto-Slavic: PS) の段階に想定される形。現在の一般的な表記法では \*suta, 以前の表記法では \*suto. ロシア語の文献ではいまでも \*suto と記すことが多い。早期スラブ祖語の \*u を \*ъ と記すのは著者の主義であるが混乱を招くので賛成しかねる。分岐直前の段階である後期共通スラブ語 (Spätgemeinslavisch, late Common Slavic: CS) での形は \*sъto. 個々の文字の詳しい音価については後述する。

なお、この語の第一音節の IE \*m > PS \*u (=Mareš の ъ) は異常な発達である。IE \*m は挿入母音 (anaptyxis) を獲得して PS \*im (まれに \*um) となり、さらに子音の前で鼻母音を生じて CS \*e(まれに o) となるのが通常である。現に同じ語根(訳註5参照)から IE \*dekmt-tis 「10」 > PS \*desimtis > CS \*desęty (>OCS desęty, R десять) が生じている。挿入母音については神山(1995: 206f.)を参照。

- (8) ['] はその左側の子音に第二次調音としての硬口蓋化を加えることを示す簡易的記号である。音声学では ['] を添えるか子音字の下に [j] を加える。印欧祖語の \*m はラテン語では支えの挿入母音(訳註7参照)

を伴って em となり、後続する t に調音点を同化して en となっている。最終音節の o はラテン語では u と書かれるが、その後の俗ラテン語の時代には o に戻る (イタリア語 *cènto* [tʃénto] 参照) ためラテン語の最終音節の u の音価には o と u の中間的性質を持ち、かつ緊張の弛緩した [u] が予想される。調音点の同化については例えば神山 (1995: 157ff.) を参照。

- (9) バルト語は o を a に転じている。例: IE \*k̑ȓtom > Lith. *šimtas* 「百」。ここで第一音節の i は挿入母音 (訳註 7 参照)。リトアニア語は中性名詞 (-m) を男性名詞 (-s) とした。ただし, IE \*ō > Lith. *uo*, IE \*ā > Lith. *o* (=ō) のように長音は区別を保った。Cf. IE \*dō-「与える」> Lith. *dúo*(ti)/OCS *da*(ti); IE \*stā-「立つ」> Lith. *stó*(ti)/OCS *sta*(ti)。
- (10) 主としてブルガリアの学者はマケドニア語を独立した文語とみなさない。
- (11) かつてはセルボ・クロアチア語の呼称が一般的であった。政治的な理由によりセルビア語とクロアチア語という別個の文語が作られつつあるが、両者の差異は例えば日本語の関東方言と関西方言のそれよりもはるかに小さい。註19を参照。
- (12) 旧東ドイツのラウジッツ地方周辺に残るスラブ語。シュプレー川の上流に近い方から上・下の二言語に分かたれる。ドイツ語地名ラウジッツ *Lausitz* は「湿地」を意味する *Łužica* に由来する。自称の *Serbja* より本来は「セルビア語」と呼ばれるべきかもしれないが、バルカンのセルビア語との区別のため英語の *sorbian* 等をもとにソルブ語と呼ばれるものが普通になっている。地名からのラウジッツ語 (英 *Lusatian*) や、スラブ人の古いラテン名 *venedi* に由来するヴェンド語 (英 *Wendish*, *Wendic*; 独 *Wendisch*) のような呼び方もある。ロシア語では *лужицкий* (ラウジッツ語)、あるいは *серболужицкий* (セルビア・ラウジッツ語?) のように呼ばれる。
- (13) 革命以前は小ロシア語と呼ばれた。
- (14) 以前は革命前の呼称に基づき白ロシア語、あるいはベロロシア語のように呼ばれた。
- (15) 革命前は大ロシア語。
- (16) 著者独特の転写方法による。後述 (4.1参照) するような、スラブ語の前史を二分する一般的になりつつある表記法に従うと、(早期) スラブ祖語 (PS) \*světjā/\*nakti, \*medjā, (後期) 共通スラブ語 (CS) \*svět-ja/\*noktŭ, \*medja。
- (17) 正書法に従えば *вещ, нош, межда*。ロシア語の場合と違って ш は [t] と読む。本来 ш は ш と т を縦に重ねて作った字 щ で、後に下の棒が右にずれた。PS \*tj/\*kt, \*dj が Bg [t], [zd] に転じた経緯についての納得のゆく定説はない。私見では、まず [t] [d] が後続する硬口蓋音 [j] に調音点を同化して長い硬口蓋閉鎖音 [cc] [jj] が生じたと仮定したい。kt も両要素 (軟口蓋音と歯(茎)音) の調音点が接近すれば中途に仮定されるのはやはり長い硬口蓋閉鎖音 [cc] である。硬口蓋閉鎖音の調音は比較的難しいためか、概してこの音を持つ言語は少なく、かつて持っていたと思われる言語でも何らかの手段でこれを排除している。スラブ語もマケドニア語を例外として次の段階で硬口蓋閉鎖音を響きの似た別な音へと置き換えている (ただし、チェコ語とスロバキア語は後に [t] [d] より新たに [c] [j] を獲得した)。その置き換えのしかたは言語によって様々であり、古代教会スラブ語及びブルガリア語は以下に記すような前要素を摩擦音とする異化を経験したと思われる。例えばロシア語の \*/vedti/>\*/veti/>vesti/(вещи) や \*/legko/>\*/lekko/>/lexko/(легко) の下線部に見られるように、スラブ語は同じ閉鎖音が連続するとき前要素を摩擦音化してその連続を排除する方法を取ることが多い。この異化によって [cc] [jj] > [çc] [jç], さらにこの後調音点が次第に前に移動して [çt] [zd] > [t] [zd] が順次生じたと思われる。現代のブルガリア語はその最後の段階を持つが、古代教会スラブ語の št žd は明らかに軟音 (硬口蓋化音) 性を示すため、その直前の段階にあったのではないかと思う。異化については例えば神山 (1995: 185ff.) を参照。
- (18) 原文の *megá* は *méga* の誤。正書法に従うと *свека, но́к, ме́га*。*ǰ* はそれぞれ硬口蓋閉鎖音 [c] [j] を表す。註17に記したように、スラブ祖語の \*tj/\*kt, \*dj より得られるはずの [cc] [jj] を短縮するだけで保持したのは現代スラブ諸語の中でマケドニア語だけである。
- (19) アクセントを明示すると *svijěca~svěca, nōc, mēda*。共通スラブ語の \*ě (註27参照) に対し (i)je を持つ方言と e を持つ方言が主としてあり、これらは (イ) ェ方言 (*ijekavski*)、エ方言 (*ekavski*) と呼ばれ、それ



それクロアチア語、セルビア語にはほぼ対応する。これ以外にもイ方言 (ikavski) があるが標準的とは認められていない。ć đ (キリル文字だと h ħ) の発音は標準的日本語のチ、語頭のジの子音部 [tʃ] [dʒ] に等しい。PS \*tj/\*kt, \*dj より生じた [cc] [jj] は閉鎖をゆっくりと解放すれば破擦音 [cç] [jʝ] となり、さらに調音点が若干前進して [tʃ] [dʒ] となったと考えられる。セルビア・クロアチア語はこの時点の発音を保持している。

硬口蓋閉鎖音を歯擦音によって置き換える現象は他の言語でも頻繁に生じ、例えば英語の church (<古英 cirice<ゲルマン祖語 \*kirika) 等にも見られる。軟口蓋音が前後にある前舌母音 (硬口蓋的) の影響でその調音点を前進させ、その後で予想される硬口蓋音を [tʃ] に歯擦音化している。このような音変化を単に「硬口蓋化」(註3に記したように「口蓋化」は誤り) と呼ぶのが普通だが、正確には「硬口蓋化+歯擦音化」である。

また、一般にアクセント記号 (´)(˘)(ˊ)(ˋ) はそれぞれ上昇調長音節、上昇調短音節、下降調長音節、下降調短音節を示すとされるが、実験音声学の研究によると上昇調とはアクセントのあるはじめのモーラも次のモーラも高く発音されることを、逆に下降調とはアクセントのあるはじめのモーラだけが高く、次のモーラは低く発音されることを示していると考えられる。従って厳密には「上昇・下降」の呼称は適当でない。詳しくは Lehiste&Ivić (1986) を参照。神山 (1988) に日本語での簡単な紹介がある。

- (20) スロベニア語では、無声の \*tj/\*kt (>[cc]) と有声の \*dj (>[jj]) は不均一な発達を示す。無声の [cc] はセルビア・クロアチア語の場合と同様に破擦音化して [cç]>[tʃ] から調音点がさらに少し前進して č[tʃ] に至っている。一方、有声の [jj] は短縮化され、閉鎖がゆるくなって摩擦音 [j] になり、さらにせまめが広がって接近音 (半母音) の [j] となった。一般に有声音の調音は無声音の場合よりも弱くなりやすいためこのような説明も充分に可能である。例えば英語でも、無声の [c] が [tʃ] となる (註19参照) のに対し、yesterday (<古英 giestran dæg, Cf. ドイツ語 gestern, Tag) に見られるように有声の [j] は [j] に転じている。
- (21) いわゆる西スラブ語では (\*tj/\*kt>) [cc] は破擦音化して [cç], 調音点が激しく前進して [tʃ]>[tʃ]>[tʃ] にまで至ったと思われる。[jj] は同じく破擦音化と調音点の前進によって [jʝ]>[dʒ]>[dʒ]>[dʒ] となり、註20にも記した有声音の調音弱化的ためポーランド語以外で閉鎖音部を失って [z] となった。[c]>[tʃ] は例えば VL centu ~ cento (Lat. centum)>OF cent にも見られる。ただし13世紀に下線部の閉鎖音が失われ、今日のような [s] となっている。
- (22) 東スラブ語では \*tj/\*kt は [cc] から破擦音化と調音点の前進によって [cç]>[tʃ]>[tʃ] となっている。有声の \*dj も [jj] より同様に破擦音化と調音点の前進により [jʝ]>[dʒ]>[dʒ] となったと想像されるが、そのどこかの段階で有声音の調音弱化的により閉鎖音部を失い、さらに調音点を前進させ (言い替えれば硬化して) \*ʒ にもまで至っている。ウクライナ語の活用においては形態論的均一化 morphological leveling (あるいは過剰矯正 hypercorrection) によって再度 d が挿入されたと考えられる。
- (23) ポーランド語で文字通りには「海辺語」を示す。ラテン名よりポメラニア語とも呼ばれる。
- (24) 任意の子音を t で示す。これらの音連続には本来必ず母音が後続する。アステリクスは訳註者。
- (25) チェコ語とスロバキア語及びウクライナ語では [g] の閉鎖が不完全となって摩擦音化し、有声軟口蓋摩擦音 [ɣ] を経て有声音門摩擦音 [ɦ] に転じている。同様の現象は南ロシアの方言にも生じる。[g]>[ɣ] は註20~22に記した有声音の調音弱化的によって説明されよう。いわゆる鼻濁音のない日本語諸方言で母音には含まれた /g/ が [ɣ] と発音されるのに似た現象である。軟口蓋摩擦音を声門摩擦音に転じた過程は英独等のゲルマン語を想起させる: e.g. heart, Herz<Gmc. \*hertōn- [x]<IE \*kerd-en-; Cf. \*kr̥d-ik-o->CS \*sъrdьce, R сердце。
- (26) 本文4.5以下に述べられているように前史時代のスラブ語は閉音節を排除する傾向を持っていた。tart-V (V は母音) 等は tar/t-V/ のように音節切りされ、その第1音節は閉音節となるため開音節化が行われた。その方法には方言によって以下の3種がある: ①第1音節末尾の「母音+流音」の順序を逆にする (メタテーゼ, あるいは音位転換); ②メタテーゼを生じ、かつ母音を延長する; ③第1音節末の流音の後に母音を加える。南スラブ語とチェコ語、スロバキア語は②の方法を取ったが、その他の西スラブ語は①であ

る。ちなみに③は東スラブ語に特有な方法。5.2, 註34参照。

- (27) 古代教会スラブ語やロシア語の旧正字法などで用いられた ѣ (ローマ字転写では ě) は母音を表す文字で、ロシア名の ять あるいは jat', jat 等と呼ばれる。ここでは本文に従い Jat と呼んでおく。比較言語学的には下記の第一及び第二の Jat の起源から [e] に類する音が期待されるが、現代スラブ諸語は [i] [e] [a] などまちまちな反映を持っているため内的再構の見地からの共通スラブ語期の音価推定はかなり難しい。グラゴール文字で書かれた古代教会スラブ語の文献(あるいはその写本)では前舌の開母音が予想されることからその音価は [a] あるいは [æ] と思われる。第一の Jat は IE \*ē に、第二のそれは IE \*ai, \*oi (> PS \*ai) に起因するが、その他に南 e/北 ě なる不思議な分布を示す語尾の「第三」Jat がある。これが現れる yo 語幹・yā 語幹名詞の複数対格語尾はそれぞれ IE \*yons, \*yāns > PS \*jans, \*jāns > \*jens, \*jēns (最後の変化は音節内調和, 4.6.1参照) に遡ることから、問題なのは末尾子音の脱落と鼻母音化の生じた相対年代だと考えられる。すなわち, yo 語幹の場合には s も n も脱落して代償延長 (compensatory lengthening) によって \*ē > \*ě を生じた方言と, n が脱落しない段階で鼻母音化 (\*en > \*ĕ) を起こした方言との差異が、また yā 語幹の場合には鼻母音化を起こさずに単純に n を脱落させた方言と鼻母音化を生じた方言の差異がそれぞれ生じたと説明できる。南 e/北 ě の相違は yā 語幹名詞単数属格にも見られるが、その本来の語尾の形の再建は難問である。比較言語学の見地からは一般に IE \*-y-ā-os > \*-yās が仮定されるが、そこから PS \*-jās > \*-jēs > \*-jē > CS \*jē は説明できても鼻母音が導かれぬ ([j] は印欧祖語では y で、PS や CS では j で記されるのが慣例)。Szemerényi (1990: 200) は \*-ās がスラブ語において変形されて \*-ans になったと仮定しているが、この「変形」が説明不能である。あるいは形態論的な類推によって (y)ā 語幹の複数対格と単数属格が同一語尾となった可能性もあろう。これらのような想定が正しければ上の場合と同様に問題は脱落と鼻母音化の行われた順序ということになる。いずれにせよ、これらの形が単純に CS \*ĕ (? ?) に遡るとする Mareš の記述は誤りである。
- (28) 比較言語学的には PS \*-o-mi が期待されるため、南スラブ語の形が正統と考えられるが、北スラブ語の形の説明は難問である。u 語幹の PS \*-umi > CS \*-ьми から借用であるとか、主格 CS \*-ь の影響であるとかいった説明も可能かもしれないが、いずれも説得力を欠く。また、単数具格で \*-mi を示すのは印欧語全体の中でバルト語とスラブ語のみである。ゲルマン語にも \*-m- の要素の痕跡が見られるというが訳註者はその詳細をつまびらかにしない。
- (29) 主として形容詞の末尾に加えた限定的意味を持つ(指示)代名詞 \*jь のことと思われる。例えば北グループ内のロシア語では、これを加えていない形が短語尾(例えば добр < CS \*dobrь), 加えている形が長語尾 (добрый < CS \*dobrьjъ) と呼ばれており、その現代の用法に限定性は無関係である。一方、南のセルビア・クロアチア語では d'obar (< CS \*dobrь, 下線部の語源的に説明できない母音は挿入母音(註7参照)) と d'obrī (< CS \*dobrьjъ) が対立しており、後者はあたかも英語の the が付いた名詞のように限定性を表している。同じく南のブルガリア語は名詞の末尾に指示代名詞起源の ѣт та то を加えて限定性を表す。このようないわゆる「後置冠詞」はバルカン言語連合の特徴の一つである。
- (30) 少々不可解な表現。南では未来形は動詞が本来的に完了体であるか否かに関わらず一様に構成される。例えばセルビア・クロアチア語では ěu biti あるいは biću のように hteti 「欲する」(< CS \*chъtĕti) の現在形に動詞の不定形あるいは語幹を加えることによって、ブルガリア語では ще чакам のように動詞の現在形に「欲する」を意味する小詞を加えることによってそれぞれ未来形が作られている。一方北では例えばロシア語やチェコ語に見られるように、不完了体は南と同様に助動詞によって未来形を作るが、完了体は現在形と同様の活用によって未来を表している。このような事情を「南には真の未来形があり、北にはない」と表現していると思われる。
- (31) スロベニア語では一般にアクセント母音は非アクセント母音よりも長い。スロベニア語には母音の長短の対立があると言われているが、私見ではスロベニア語の母音の長短はロシア語やポーランド語の場合と同様にアクセントによって付随的に生じる現象であり、したがって音韻論的ではありえない。
- (32) 原著ではロシア文字の ѣ が記されているが、不可解なのでイギリス英語 (RP) の bird の母音部に現れる [ɜ] の意に解した。不正確な表現で、文字通りには [ɜ] から調音点を後方に移動した母音、すなわち [ʌ] ある

いは [ɣ] に類する母音と解されるが、事実には合わない。むしろ「軟口蓋的な」(後舌の旧称)を誤って「狭い」の意味で用いていると考えるべきであろう。そう解釈した場合には狭い [ɣ], すなわち [ə] あるいは広めの [i] のこととなり、事実と合致する。普通は簡単に [ə] で記される。個々の記号の表す音価については神山(1995)等を参照。ここに見られるように歴史言語学 proper の言語学者は一般に音声学の知識が不十分な場合が多い。

- (33) スラブ語の前史に存在が仮定されている中国語の四声のような弁別的音調変動のこと。4.2参照。かつてはイントネーションとも呼ばれたが文音調と区別できなくなるので好ましくない。セルビア・クロアチア語のトーン(註19参照)はかなり明白だが、訳註者はスロベニア語のそれについては懐疑的である。また註2にも記したが、バルト・スラブ語の弁別的音調変動の存在に対しても慎重な態度を取りたい。現代のスラブ諸語、特にセルビア・クロアチア語あるいはスロベニア語に於ける音調変動は必ずしもスラブ祖語に於ける弁別的音調変動の存在を前提としないからである。
- (34) korova は Cz kráva, Pol krówa, SCr kràva 等と同様に PS \*karvā > CS \*korva に遡る。閉音節を排除するために他の現代スラブ諸語が PS ar の順序を逆にして ra (多くは母音の延長を伴って \*rā > CS ra) としたのに対し、いわゆる東スラブ語で r の後にも母音を挿入した現象を指す。5.2及び註26参照。独仏語ではしばしば R polnoglasię を翻訳借用して Vollaut, pleophonie (>E pleophony) と呼んでいる。日本語でも同様の翻訳借用語「充音」が浸透しつつある。故佐々木秀夫先生による「母音重挿」もわかりやすい訳語である。また「畳音」も用いられることがある。
- (35) 印欧語では語根と本来の語尾の間に母音 e/o (幹母音 theme あるいは thematic vowel) を挿入するタイプの変化形式と、このような母音を用いず、語根と本来の語尾とを直接つなげるタイプとがあり、これらをそれぞれ幹母音的 thematic (тематический), 非幹母音的 (無幹母音的) athematic (нетематический) と称する。母音語幹動詞, 子音語幹動詞のようにも呼ばれることがある。例えば現代ロシア語の читает は厳密には čit-a-j-e-t と分析され、その本当の語尾は入門書等に記されるような et ではなく、t のみであってその前に幹母音 e が挿入されているのである。現代ロシア語には無幹母音動詞は дать (1人称単数 дам < CS \*dad-m-ь, 3人称単数 даст < \*dad-t-ь) と есть (同 ем < \*ēd-m-ь, ест < \*ēd-t-ь) のたった2語しかない。共通スラブ語の音連続 dm では d の脱落が, dt > tt では前要素の摩擦音への異化がそれぞれ行われている。Pol czytam, SCr čitam のように他のスラブ語では幹母音タイプの動詞1人称単数にも無幹母音タイプの語尾 -m を援用してしまうことが多いが、北東スラブ語グループ(いわゆる東スラブ語)にはこのような現象は生じていない。
- (36) 「唇音+j+母音」が期待される位置で j の代わりに l' (恐らく本来的には硬口蓋側音 [ʎ]) が生ずる現象(例えば R люб-ит < CS \*l'ub-i-t- 等に対し любл-ю < \*l'ubjō < \*l'ub-i-ō) のこと。伝統的には「挿入音」(epenthesis) と称されるが、j の置換とみなすのがより合理的なため、「異化」と呼ぶほうが適当と思われる。5.4参照。このような現象は現代の北東及び南西スラブ語に現れ、その他には見られないため、かつて全スラブ語地域に生じ、後に北西及び南東部で失われたと考えられている。
- (37) ドイツ語では Urslavisch「スラブ祖語」が一般的だが、フランス語では前史全体を slave commun「共通スラブ語」と呼ぶのが普通。英語やロシア語はこれらの翻訳(Proto-Slavic/пращлавянский язык; Common Slavic/общеславянский язык)を用いている。これらの使い分けについては神山(1992: 98)参照。
- (38) Birnbaum は early Proto-Slavic, late Common Slavic (露訳では раннепращлавянский язык, позднеобщеславянский язык) を提唱しているので、少々用語に混乱が見られる。
- (39) スラブ祖語あるいはバルト・スラブ語では長音節に acute/circumflex (本来は単なるアクセント記号の名称) と呼ばれる二種類の音調の弁別が成されたと思定されている。一般にスラブ語内のデータからは acute は上昇の音調を, circumflex は下降の音調をそれぞれ示すと考えられるが、リトアニア語は逆に acute を下降調で, circumflex を上昇調で具現するため、これらの本来の音声的実現の解明は大きな難問である。

Saussure が «A propos de l'accentuation lituanienne» (1894) で明らかにしたように、比較言語学的には acute は印欧祖語の本来的長母音或いは音節主音の長ソナントに, circumflex は二重母音或いは二次的に

生じた長音節にそれぞれ由来する。彼は有名な «Memoire» (1879) に於いて今で言う laryngeal の存在を既に予測していたが、彼が明らかにした acute の起源は結局のところ母音(或いは音節主音的ソナント)に、彼自身が印欧祖語に於ける存在を予測していた laryngeal(H) が後続した場合に他ならない。すなわち、印欧祖語の母音はもともと常に短く、これに音韻 H が後続した場合に、H が脱落し、前の母音が代償延長されることによって長母音が生じたと考えられる。バルト・スラブ語においてこのような古い長母音(>acute)が、後に別な理由で生じた新しい長母音(>circumflex)とは主として suprasegmental なレベルで異なった発達をしたのならば、その相違点はやはり suprasegmentalis にあったのではないかと考えられているに過ぎない。

訳註2及び33にも記したように訳註者はスラブ祖語における acute/circumflex の存在に懐疑的である。

- (40) 研究者によって色々な記載方法が用いられている。Mareš の記載法の他にも以下のような記載方法が用いられることがある。

Shevelov	Stieber	Carlton
ĩ    ũ	ĩ    ũ	ĩ    ũ
.ã    ǃã	ě    ǃ	ǃ    ǃ

これらのうち最も一般的なのは Stieber 式。ロシアの研究者の中には後舌の開母音に o a の二母音を用いる場合があるが、両者は早期スラブ祖語の時代には区別されないものであるからその一方だけを記せばよい。訳者としては予想される音声の実現に最も近いと考えられる Carlton の表記法に賛成である。ただし、スラブ祖語の後舌狭母音は後の発達から見て円唇性を持たないのは明らかで、後舌よりも中舌に近い狭母音が予想されることから、彼の記号 u は不適と思われる。訳者としては予想される IPA[i] あるいは [u] を採用したい。Mareš の y もこのような母音を記していると考えられる。以下の訳註においては仮に u と記す。

- (41) ロシア語で用いられる ъ ъ は今ではそれぞれ硬音記号、軟音記号であって特定の音価を持たないが、古代教会スラブ語では母音を表す文字で、ロシア語でそれぞれ ер ерь と、両者を合わせて еръ と呼ばれる。英語では hard jer, soft jer (ロシア語の発音を模した英音 [jeə], 米音 [jeə] と読まれる)と、日本語では「イェル, イェリ」が普通。後期共通スラブ語あるいは初期の古代教会スラブ語ではそれぞれ非常に短い母音 u(=Mareš の y) と i を表していたと考えられているが、その正確な音価は不明。u(=y) の音価については訳註40参照。早期スラブ祖語の再建形にはこれらの文字を用いないのが慣例だが、Mareš は古い (PS と CS を区別しない) 表記法との妥協のためか PS \*i \*u と \*ь \*ь とを同じ意味で用いている。混乱を招く恐れがあるため彼の表記法には同意し難い。
- (42) ここでは噪音 obstruent のこと。
- (43) 英語ではこれを ruki-theory あるいは ruki-rule と呼ぶことがある。原著者は y (<IE \*u) を記していることから、この現象がスラブ語の時代になってから生じたものと考えていると思われる。しかし同様の現象はバルト語にもインド・イラン語にも見られることから、これらの語派が生まれる以前、すなわち印欧祖語の崩壊期あたりまで遡ると考えねばならない。また、ここに記された ch は普通軟口蓋摩擦音 [x] を表すと考えられているが、u k の後で s の調音点が順行同化によって後退し、軟口蓋摩擦音になることは理解できても、i r の後では同様の現象は生じえない。神山 (1995: 154) にも記したように、i の後では順行同化によって硬口蓋摩擦音 [ç] は生じる可能性がある。恐らくは u k の後で生じた [s] > [x] と、i の後で生じた [s] > [ç] とが、一つの音素 /ch/ を成すようになったと思われる。一方、r の場合は難問で、r が一般的に想定されているような舌尖の [r] であったとすると、[rs] は挿入音を獲得して [rts] となりやすいから、これを避けるためにこの音連続では [s] を [x] に異化したのではないかという試案をかつて述べた。神山 (1995: 155f.) 参照。相対年代の観点からはこの異化は音素 /ch/ が生じた後にしか起こり得ない。あるいはまた r の影響で後続の [s] が調音点を移動したのかもしれない。その場合生じる可能性がありそうなのはせいぜい反り舌の [ʃ] ぐらいである。現に Gk τέρσομαι や G Durst (\*tʃs-) に対してサンスクリットは

- tʃs-nā- のように r の後で s を ʃ すなわち [s] に転じている。後者の場合には先行音 i u r k への同化によって [s] から生じた [x] [ç] [ʃ] が同一音素 /ch/ を構成したことになる。
- (44) 印欧祖語において r l m n 及び i(=y) u(=w) は母音と子音の中間的な位置を占め、前後の音声環境に従って音節を成すこと(すなわち母音的)も、成さないこと(子音的)もあったと考えられている。これらは伝統的にソナントと総称される。原著者の「二重母音」はより正確には *diphthongoid* と呼ばれ、二重母音的結合と疑似二重母音と訳される。r l i u がこのような母音と子音の中間的な位置を占めていることは、インド文法学の成果を取り入れた近代言語学では比較的古くから認められていたが、m n も同様の機能を持っていることを初めて明らかにしたのは Brugmann である。
- (45) 既に定着してしまっている感があるが、「法則」という名称は誤解を招く恐れがあり、訳註者個人としては「傾向」とでも呼び代えるべきだと考える。
- (46) 後続する j に様々な子音が同化して生じる現象。本文5.4、及び \*tj=\*kt \*dj については3.2を参照。この現象は音声学的にはもちろん硬口蓋化とそれに付随する変化であるが、スラブ語学の慣用としては硬口蓋化ではなく「j化」(*jotation, yotation, yodicization etc.*)と呼ばれている。「硬口蓋化」は軟口蓋音の場合のみ用いられるのが同じくスラブ語学の慣用となっている。
- (47) 訳註19にも記したように硬口蓋閉鎖音は概して安定性に乏しく、[tʃ] [ts] のような歯擦音に転じる場合が非常に多い。
- (48) 一般的な呼称ではない。子音については *palatal/velar* を、母音については *front/back* を用いるのが現在の慣用のため、むしろ「前舌化」がよからう。
- (49) PS \*ai は CS \*ě となるのが原則だが、o 語幹名詞男性複数主格、形容詞及び代名詞男性複数主格、命令法 2・3人称単数の場合に限り CS \*i が対応する。この不思議な現象についての納得できる説明は知られていない。
- (50) 原文では ch、予想される音価は [ç]。
- (51) これも非常に大きな難問の一つだが、訳註者も形態論の見地から原著者と同様に第1→第3→第2の順序が最も適当と考える。すなわち、①「父」単数主格 PS \*atikas>CS \*отъсь 及び単数呼格 PS\* atike>CS \*отъче により第1→第3が、②「くびき」PS \*jugam>CS \*jъgo=\*igo により軟子音の後の後舌母音の前舌化は第3硬口蓋化後に生じたことが、③「父」単数所格 PS \*atikai>\*aticai>\*aticei>CS \*otъci により前舌化の後に二重母音の単母音化が生じたことが、そして当然だが④「狼」単数所格 PS \*vilkai>\*vilkē>CS \*vylcě より単母音化の後に2硬口蓋化が生じたことがわかり、①②③④の結果として第1→第3→前舌化→単母音化→第2という相対年代が露呈することになる。
- (52) この考えは Channon (1972) により初めて活字化されたが、師に当たる Halle の発案に拠るらしい。Lunt (1981) の翻訳並びに訳註は有志諸君とともに準備中であり、このアイデアの評価については他日を期したい。
- (53) 語根は IE \*wed-, 接辞 s を加えて作られる、いわゆるシグマティックアオリストの 1.sg., 1.2.3.pl. では語根の母音が延長される。この延長を *vřddhi* とみなす研究者が大半だが、延長された母音の直後では必ず語根末の子音が脱落している点は注目すべきである。すなわち、この母音延長は、出現条件の定義が困難な *vřddhi* によるよりも、子音連続の簡略化による脱落にともなう先行母音の代償延長による説明のほうが明らかに合理的かつエコノミーにかなう。この例語の場合なら PS \*ved-s-am>\*vēsъ=CS \*vēsъ。例えば高名な印欧語学者 Szemerényi も賢明にも後者の説に賛成している。神山(1992: 98f.; 1995: 164) 参照。この点についての論考は数年前に作成したが未発表となっている。いずれ手を入れて公表したい。
- (54) dt/tt>st は調音様式の異化。例えばギリシア語にも同様の現象が見られる。神山(1995: 185ff, 260) 参照。この変化によって先行音節の開音節化が達成されたとする伝統的説明は少なくとも Jespersen 流の「きこえ」(*sonority*) に基づく音節論の観点からは誤りである。したがって「きこえ増大の法則」などと表現されるスラブ祖語の音節構造改変の説明も誤りである。
- (55) ō の段階を想定する積極的必要性はない。
- (56) ここで ū と記されているのは恐らく jū。いわゆる *jotation* と一致する後の変化から考えて初頭に [j] を持

- っていたのは明らかである。これがさらに  $\bar{u}$  に転じるというのは信じ難い。原著者の誤解であろう。次の註も参照。
- (57) 恐らく原著者の誤。語根 IE \**teu(ə)*-「膨れる」(Watkins) から直接にはなく、その名詞的な形である  $\circ$  階梯に接尾辞 *-k(o)-* を付した IE \**touk-* > PS \**tauk-* から導くべきであろう。
- (58) これはもちろんきれいな三角形の体系ではない。新たに後舌の円唇狭母音に加わった状態を著者は仮に「三角形」と表現しているものと思われる。註56に記したように  $\bar{u}$  は余剰である。
- (59)  $\bar{u}$  のこと。弱母音、弱化母音とも呼ばれる。註41参照。
- (60) 閉音節を回避するために、メタテーゼを生じている。3.2, 及び訳註26, 34参照。
- (61) 単数主格では語尾がゼロとなり、これによって生じた閉音節中の \* $\circ$  は恐らく二次的な代償延長を経て狭母音化を生じ、 $\acute{o}[u]$  となっている。
- (62) 期待される \**telet* は実証されない。l が軟口蓋化していた、あるいはロシア語的言い回しだと「硬く」発音された [t] であったため、それにつられて先行する母音 e も軟口蓋化 (=後舌化) して  $\circ$  となり、北東スラブ語では *telt* が *tolt* と一致してしまったと考えられている。この伝統的説明法はかなり *probable* である。軟口蓋化した l である [t] の前にある前舌母音が後舌化するの音声学的に言語の別を問わずかなり広く見られる現象で、例えば近代英語の *always, call, tall, ball* にも見られる。また、このように発音しにくい音連続の間に母音を挿入してしまう現象 (anaptyxis) も、言語の別を問わずしばしば生じる。スペイン語の *gracias* 「ありがとう」が第一音節初頭の子音連続の間に母音を伴って [garáθias] と発音されることなどを参照。
- (63) 普通この発達は「第二充音」(полногласие второе) と呼ばれている。
- (64) その後の segmental な音発達や、アクセントの観点から、スラブ祖語 (あるいはそれ以前) に期待される長音節にはどうやら二類の区別があったと思われる。この区別がいかに行われたのかは不明だが、現在のところ支配的なのはこの区別が音調 (あるいは声調) によって行われたとする考え方であり、印欧祖語から受け継がれた本来的長母音 (Ferdinand de Saussure に始まる喉音理論に従えば本来的母音+喉音) に起因する音調を *acute* と、二次的な延長によって生じた長母音の音調を *circumflex* と称している。これらは母音字の上に書くアクセント記号の名に由来し、普通は英語読みで呼ばれる。
- (65) eg. OCS *ramo, ramen-*, ロシア語では雅語として *рамѣна* 「両肩」のみが現用。ドイツ語 *Arm* 等と同様に IE \**ar(ə)-mo-* に遡る。
- (66) R *лакомый* 「おいしい」や *лакомство* 「甘いもの」は *лакаты* 「びちゃびちゃ飲む」(<CS \**olk-ti*) の受動分詞現在に起因する。メタテーゼを生じていない形 *алкаты* 「渴望する」との関連は不可解である。
- (67) スラブ祖語に予想される形は \**dausjā* (Mareš の書き方では \**dausja*) である。誤植であろう。
- (68) 予想される当初の音価はそれぞれ [r] [k] [ŋ]。
- (69) 恐らくこの現象は発音困難な音連続の一方を別な音に変えること、すなわち異化と思われる。伝統的な呼称「挿入音」は語源的に予想されない音が挿入されることを示すため不適當である。
- (70) この指摘は明らかな誤り。このような *jotation* と呼ばれる現象の根本的原因は明らかに先行子音の後続 [j] への調音点の同化である。唇音以外については調音点の同化、すなわち硬口蓋化とそれに付随する諸変化によってすべて説明できる。一方、唇音の場合には主たる調音点を硬口蓋に接近させればその唇音性が失われてしまうので、唇音性を保ちつつ現代ロシア語の軟音のように第二次調音として硬口蓋化を加える以外の道はない。期待される [p] [b] タイプの音はなぜか当時のスラブ語では許容されず、聴覚印象の似た [pʌ] [bʌ] タイプに置き換えられたと思われる。
- (71) 音声学的には不正確な表現。弱化は非アクセント母音の調音点がおおむね中央寄りになる現象であるから、中舌化した e, o, すなわち [e] [ó], あるいはそれらとほぼ等価の [i] [u] のことと思われる。原註6に記されているように、原著者は  $\bar{u}$  を非弱化音節に現れる [ə] の意で用いているが、むしろ  $\bar{u}$  を強勢のあるなしに関わらず用いるべきと考える。Gimson も [ɜ] と [ə] は同じだと言っているし、Jones は [ə] のみを用いていた。訳註32参照。
- (72) それぞれ前舌と後舌の異音を表すと思われる。

- (73) 助動詞としては *iměti* 「持つ」も用いられる。現代ロシア語を含めて多くの現代のスラブ諸語は助動詞に *быть* を用いている。
- (74) ここではギリシア名に統一した。コンスタンティノス (キュリロス) はコンスタンティン (キリール), メトディオスはメトディーあるいはメフォーディー等とも呼ばれる。
- (75) *Isaak Taylor* は多くのグラゴール文字の起源をギリシア語のミヌスクラ体求めた。*Селищев* (1951) によればこれ以外にも古代ヘブライ、サマリア、コプト文字からの借用が行われているらしい。ミヌスクラ体、及びウンキアリス体の見本も同書に載っている。
- (76) 主としてウクライナに行われる正教とカトリックの要素が混じり合った教会。988年に東方正教を受け入れたが、後にカトリックを奉じるポーランドの支配下に置かれたためこのような合同が行われた。ウクライナ・カトリック教会とか、ギリシア・カトリック教会、あるいはユニエイト等とも呼ばれる。原 (1994: 70f.) 参照。

参考文献 (原著)

- Arumaa, P. 1964-76. *Urslavische Grammatik*. Bd. 1: Einleitung, Lautlehre, Vokalismus. Bd. 2: Konsonantismus. Heidelberg.
- Arcichovskij, A.V. 1954. *Osnovy archeologii*. Moskva.
- Bauer, J. 1965. Staroslavjanskij jazyk i jazyk žitelej Velikoj Moravii. *sopostavlenie sintaksičeskogo stroja*. *Magna Moravia*. 469-492.
- Birnbaum, H. 1966. The Dialects of Common Slavic. *Ancient Indo-European Dialects*. 153-197.
- Birnbaum, H. 1970a. Internal Reconstruction, Order of Synchronic Rules in Generative Grammar, and the Problem of Early Balto-Slavic Relations. *Problems of Typological and Genetic Linguistics Viewed in a Generative Framework*. The Hague. 92-122.
- Birnbaum, H. 1970b. Four Approaches to Balto-Slavic. *Donum Balticum*. 69-76.
- Birnbaum, H. 1975. *Common Slavic. Progress and Problems in its Reconstruction*. Ann Arbor.
- Čejka, M., Lamprecht, A. 1963. K otázce vzniku a diferenciacie slovanských jazyků. *Sborník prací filosofické fakulty Brněnské university* 12. 5-20.
- Diels, P. 1932, 1962<sup>2</sup>. *Altkirchenslavische Grammatik*. Heidelberg.
- Dvorník, F. 1959<sup>2</sup>. *The Slavs: Their Early History and Civilization*. Boston.
- Dvorník, F. 1970. *Byzantské misie u Slovanů*. Praha.
- Eisner, J. 1948. Les origines des Slaves d'après les préhistoriens tchèques. *Revue des études slaves* 24. 129-142.
- Grivec, F. 1960. *Konstantin und Method, Lehrer der Slaven*. Wiesbaden.
- Jagić, V. 1913<sup>2</sup>. *Entstehungsgeschichte der kirchenslavischen Sprache*. Berlin.
- Jakobson, R. 1929. Remarques sur l'évolution phonologique du russe comparée à celle des autres langues slaves. *TCLP* 2. (再版 Nendeln/Liechtenstein 1968.)
- Jakubinskij, L.P. 1953. *Istorija drevnerusskogo jazyka*. Moskva.
- Karskij, E.F. 1928. *Slavjanskaja kirillovskaia paleografija*. Leningrad. (再版 Moskva. 1979.)
- Koder, J. 1978. Zur Frage der slavischen Siedlungsgebiete im mittelalterlichen Griechenland. *Byzantinische Zeitschrift* 71. 315-331.
- Kopečný, F. 1949. K otázce klasifikace slovanských jazyků. *Slavia* 19. 1-12.
- Kostrzewski, J. 1946. *Prastowiańszczyzna*. Poznań.
- Kuryłowicz, J. 1957. O jedności językowej bałto-słowiańskiej. *Biuletyn Polskiego Towarzystwa Językoznawczego* 16. 70-114 (露訳 *Voprosy slavjanskogo jazykoznanija* 3. 15-49.)
- Kurz, J. 1958. Církevněslovanský jazyk jako mezinárodní kulturní (literární) jazyk Slovanstva. *Československé přednášky pro IV mezinárodní sjезд slavistů v Moskvě*. Praha. 13-35.

- Lehr-Spławiński, T. 1946. *O pochodzeniu i praojczyźnie Słowian*. Poznań.
- Lexicon linguae paleoslovenicae. Slovník jazyka staroslověnského*. Bd. 1 ff. Praha. 1958-(1966-).
- Lunt, H.G. 1955, 1974<sup>6</sup>. *Old Church Slavonic Grammar*. The Hague, Paris.
- Lunt, H.G. 1981. *The Progressive Palatalization of Common Slavic. Skopje*.
- Magnae Moraviae fontes historici*. Bd. 1-5. (Pragae-)Brunae. 1966-1977.
- Mareš, F.V. 1961. Drevneslavjanskij literaturnyj jazyk v Velikomoravskom gosudarstve. *Voprosy jazykoznanija* 10. 12-23.
- Mareš, F.V. 1969. *Diachronische Phonologie des Ur- und Fröslavischen*. München.
- Mareš, F.V. 1979. *An Anthology of Church Slavonic Texts of Western (Czech) Origin*. München.
- Mareš, F.V. 1980. Die Tetrachotomie und doppelte Dichotomie der slavischen Sprachen. *Wiener Slavistisches Jahrbuch* 26. 33-45.
- Meillet, A. (& Vaillant, A.) 1934. *Le slave commun*. Paris.
- Miklosich, F. 1862-1865. *Lexicon paleoslovenico-graeco-latinum, emendatum auctum*. Vindobonae. (新版 Aalen 1977.)
- Moszyński, L. 1965. Przyczyny rozkładu prastowiańskiego systemu językowego. *Studia z filologii polskiej i słowiańskiej* 5. 77-85.
- Nahtigal, R. 1952<sup>2</sup>. *Slovanski jeziki*. Ljubljana. (独訳 *Die slavischen Sprachen. Abriß der vergleichenden Grammatik*. Wiesbaden. 1961.)
- Niederle, L. 1902-1925. *Slovanské starožitnosti*. Bd. 1-11. Praha.
- Niederle, L. 1923-1926. *Manuel de l'antiquité slave*. Bd. 1-2. Paris. (チエコ版 *Rukověť slovanských starožitností*. K vyd. připravil J. Eisner. Praha. 1953.)
- Pleiner, R. (& Rybová, A.) 1978. *Pravěk dějiny Čech*. Praha.
- Sadnik, L., Aitzetmüller, R. 1955. *Handwörterbuch zu den altkirchenslavischen Texten*. 's-Gravenhage.
- Shevelov, G.Y. 1964. *A Prehistory of Slavic. The Historical Phonology of Common Slavic*. Heidelberg.
- Ślawski, F. et al. 1974-. *Słownik prastowiański*. Bd. 1ff. Wrocław, Warszawa, Kraków, Gdańsk.
- Stankiewicz, E., Worth, D.S. 1966-1970. *A Selected Bibliography of Slavic Linguistics*. Bd. 1-2. The Hague, Paris.
- Toporov, V.N., Trubačev, O.N. 1962. *Lingvističeskij analiz gidronimov verchnego Podneprov'ja*. Moskva.
- Trubetzkoy, N.S. 1954, 1968<sup>2</sup>. *Altkirchenslavische Grammatik. Schrift-, Laut- und Formensystem*. Graz, Wien, Köln.
- Turek, R. 1974. *Böhmen im Morgengrauen der Geschichte*. Wiesbaden.
- Udolph, J. 1979. *Studien zu slavischen Gewässernamen und Gewässerbezeichnungen*. Heidelberg.
- Vaillant, A. 1950-1977. *Grammaire comparée des langues slaves*. Bd. 1-5. Paris.
- Vajs, J. 1932. *Rukověť hlalolské paleografie*. Praha.
- Vašica, J. 1966. *Literární památky epochy velkomoravské 863-865*. Praha.
- Vasmer, M. 1941. *Die Slaven in Griechenland*. Berlin.
- Vondrák, W. 1912<sup>2</sup>. *Altkirchenslavische Grammatik*. Berlin.
- Vondrák, W. 1924<sup>2</sup>-1928. *Vergleichende slavische Grammatik*. Bd. 1-2. Göttingen.
- Wijk, N. van 1931. *Geschichte der altkirchenslavischen Sprache*. Bd. 1: Laut- und Formenlehre. Berlin, Leipzig. (露訳 *Istorija staroslavjanskogo jazyka*. Moskva. 1957.)

## 参考文献 (訳註及び原著参考文献の補遺)

- Benson, M. 1989. *Serbocroatian-English Dictionary*. First updated edition. Belgrade: Prosveta.
- Бернштейн, С.Б. 1961. *Очерк сравнительной грамматики славянских языков*. том 1. Москва: Академия



- наук СССР.
- Бернштейн, С.Б. 1974. *Очерк сравнительной грамматики славянских языков*. том 2. Москва: Наука.
- Brugmann, K. 1898. *Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*. Bd. I-1. Berlin-Leipzig.
- Carlton, T.R. 1990. *Introduction to the Phonological History of the Slavic Languages*. Columbus: Slavica.
- Channon, R. 1972. *On the Place of the Progressive Palatalization of Velars in the Relative Chronology of Slavic*. The Hague & Paris: Mouton.
- Comrie, B. & Corbett, C.C. (eds.) 1993. *The Slavonic Languages*. London & New York: Routledge.
- Gimson, A.C. 1987. *An Introduction to the Pronunciation of English*. Third Edition. London: Edward Arnold.
- 原 卓也 (監修). 1994. 『世界の歴史と文化 ロシア』. 新潮社.
- 井上幸和. 1986. 『バルト・スラブ語彙対応の研究』. 神戸市外国語大学外国学研究所.
- 伊東一郎. 1986. 「スラヴ民族とは」. 森安 (1986: 15-115).
- 神山孝夫. 1988. 「セルボ・クロアチア語のアクセント—セルボ・クロアチア語名詞生成音韻論序説—」. 『大阪外国語大学学報』第76-1・2号.
- 神山孝夫. 1992. 「スラブ語の『娘』をめぐる」. 『ロシア・ソビエト研究』. 第16号. 大阪外国語大学ロシア語学科.
- 神山孝夫. 1995. 『日欧比較音声学入門』. 鳳書房.
- 風間喜代三. 1993. 『印欧語の故郷を探る』. 岩波新書.
- 高津春繁. 1954. 『印欧語比較文法』. 岩波全書.
- Lehiste, I. & Ivić, P. 1986. *Word and Sentence Prosody in Serbocroatian*. The MIT Press.
- Mayrhofer, M. 1978. *Sanskrit-Grammatik*. Berlin und New York: Walter de Gruyter.
- Mayrhofer, M. 1986. *Indogermanische Grammatik*. Band I. 2. Halbband: Lautlehre. Heidelberg: Winter.
- Meillet, A. 1908. *Les dialectes indo-européens*. Paris.
- Mikkola, J.J. 1950. *Urslavische Grammatik*. III. Heidelberg: Winter.
- 森安達也 (編). 1986. 『スラヴ民族と東欧ロシア』. 山川出版社.
- Pokorny, J. 1959. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. Bern.
- Schleicher, A. 1861. *Kompendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*. I. Kurzer Abriss einer Lautlehre. Weimar.
- Селищев, А.М. 1951. *Старославянский язык*. Учпедгиз.
- Szemerényi, O. 1990. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*. 4., durchgesehene Auflage. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Трубачев, О.Н. (ред.) 1974-. *Этимологический словарь славянских языков*. (Праславянский лексический фонд.) Москва: Наука.
- Watkins, C. 1985. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Wijk, N. van 1923. *Die baltischen und slavischen Akzent- und Intonationssysteme*. Amsterdam.
- 山口 巖. 1995. 『類型学序説』. 京都大学学術出版会.

(1996. 5. 2 受理)